

日本IT書紀

04 含牙篇

卷之七 乾坤

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

04 含牙篇

卷之七 乾坤

052 今カラデモ遅クハナイ

053 大陸

054 軍需動員

055 敵産なれど

056 東亞新秩序

057 駆け引き

058 誤認

059 新兵器

052 今カラデモ遅クハナイ

今カラデモ遅クハナイ

一

——生命線・滿蒙。

この言葉が政治的・経済的スローガンとして使われるようになるのは一九三〇年代に入ってからである。民衆は訳も知らないまま何とはなく、そこに込められた非常な、ないし悲壮な決意を感じ取った。

それはある種の雰囲気というものであって、財閥が權益の維持・拡大に軍事力を利用しようとし、その軍部が右翼国粹主義と結びついた結果であるという歴史的プロセスに気がついた人は多くなかった。

昭和大恐慌、金解禁、モラトリアムといった経済界の激変を経て、日本企業が滿州に投下した資本総額は対外投資の五八%を占めていた。滿州は鉄鉱石や石炭など重工業資源の輸入元であったし、かつ国内産業にとって重要な輸出先でもあった。

同時に米欧列強諸国も中国大陸と滿州に重大な関心を抱

いていた。特にアメリカ合衆国は張学良を通じて新たな鉄道や港湾の建設に資金を援助するなど、対日経済対抗策を強化しつつあった。逼迫する経済と農村の疲弊に日本の軍部は危機感を持ったといつていい。

樺太や滿州への開拓移民奨励もまた、不況と農村の疲弊を解決する策として採用されていた。つまり、国内に充満する大量の失業者を軍事力と殖民力に転用し、軍事力をもつて中国・滿州など近隣を植民地化する。

そのことで国内の負荷を軽減し、併せて生産量と消費を増やそうというのである。朝鮮、台湾、滿州さらに中華民国・山東半島の租借地まで包含したブロック経済圏こそ、大日本帝国の姿だった。

明治維新からこのかた、挙国一致で殖産興業に邁進してきた「列強入り」の無理が、五十年を経て一気に噴出したわけだった。政府・産業界は「殖産興業」「富国強兵」という明治以来の産業振興策が老朽化したことに薄々は気がついていた。にもかかわらず、資本の再整備による国力の充実こそ必要なことに目を背け、軍事力をバックボーンとする侵略主義に傾いた。

三一年四月十三日に総辞職した浜口雄幸のあと、第二次若槻礼次郎内閣、犬養毅内閣と短命政権が続き、政党政治は終焉を迎える。「愛国」の名のもとに中学校で柔剣道が

必修科目となり、田河水泡えがくところの「のらくろ」が人気を集めた。自由主義的活動に圧力がかけられ、思想調査が公然と行われるようになっていく。

評論家・大宅壮一は『一九三一—一九四五年の日本』（一九六八、世界文化社）の中で

日清・日露・第一次大戦と三回戦を勝ちぬいた日本は、いよいよ準決勝へ出場するわけだが、これは田舎の弱小チームがだんだん強くなって甲子園で優勝をねらうようなものである。その冬季合宿練習ともいべきものが、この満州事変である。

と評している。

「満州事変」と呼ばれる事件は、一九三二年（昭和六）九月十八日の午後十時過ぎに起こった。日本史で「柳条湖事件」とも表記されるのは、多分に「満州」という言葉を忌避したい気持ちがあるからかもしれない。

満州・奉天の北方七・五キロ郊外に「柳条湖」という湖がある。

筆者は高校日本史の教科書で「柳条溝」と学習した。どちらも「シ」が付く漢字だし、音も「コ」と「コウ」の違いなので、最初、ひょっとすると「湖」は「溝」の誤植で

はないかと疑った。

人というのは最初に覚えたことがらに固執する。

ところが「溝」が間違いである——というより、柳条湖と柳条溝はそれぞれに存在する全く別の地——であることが分かった。向こう岸が見えない黄河や長江を知っている中国の人は、帯状の小さな湖に「溝」という文字を当てた。このため「柳条溝」と表記する地名もあるということだ。その柳条湖の近くを南満州鉄道（満鉄）が走っていた。それが爆破された。

満鉄は日露戦争の戦果として、日本が租借権と経営権を握った。ポーツマスで結ばれた講和条約のあと、アメリカの鉄道王ハリマンがときの首相・桂太郎に資本参加を申し入れ、

——アメリカの鉄道を満鉄と結び、シベリア鉄道を経てオリエント急行に乗り入れれば、世界一周鉄道が実現すると打ち上げたことはすでに書いた。

この時代、鉄道は旅客のためにあつたのではなく、第一に物資と軍兵を運ぶためにあつた。工業の原材料を運び製品を運び、危急が生じれば万の軍兵を運ぶことができる。中国東北地域における日本の最大の資産であるとともに、最大の軍事施設であつたといつていい。同時にそれはアメリカ、イギリスにとつての垂涎の好餌でもあつた。

それが何者かによつて爆破された。

二

——答は中国にある。

関東軍は電光石火の行動を起こし、東京で緊急閣議が開かれていた間に長春、奉天など満州の要地を占領してしまつた。鉄道の爆破から軍隊の出勤・占領まで、あまりに手際がよかつた。

これがために外相・幣原喜重郎は関東軍の謀略であろうと推測し、国際世論をもつて事態の解決を図ろうとした。すなわち閣議決定で「不拡大声明」を發表するとともに、国際連盟による調査団を受け入れた。

国際連盟はイギリスのリットン卿を团长とする調査団を派遣したが、その調査は容易に進まなかつた。報告書をまとめるには一年を要した。この間、関東軍は張学良が本営を移した錦州を空爆するなど、既成事実を積み上げることができた。

リットン調査団——正式には「国際連盟日華紛争調査委員会」——はリットン卿、フランス、アメリカ、イタリア、ドイツの五か国の委員で構成し、日本と中国から一人ずつ陪席者が加えられた。

米欧列強がアジアの紛争を調停するのは国際連盟の成立過程からいつて当然のように見えるが、日本を含む六か国が侵略する側、中国のみが侵略される側だつたことを考えると、いまひとつ釈然としないものがある。

翌三二年十月二日に公表された調査団の報告書は

- ① 中国とその東北部および日本との関係。
- ② 日本と中国との紛争解決に関する結論。
- ③ 国際連盟理事会の提案。

——の三部で構成されていた。

第一部では満州が中国の構成部分であることを認め、満州事変から満州国独立にいたる経過を「日本の侵略の結果である」と断じた。

事件の首謀者は関東軍高級参謀の板垣征四郎（大佐）と石原莞爾（中佐）、鉄道を爆破したのは分遣隊長の河本末守（中尉）だつた。だが調査団は犯行者を特定せず、曖昧に済ませていた。

だけでなく提案と結論では日本の満州における権益を認めたいうえで、「事変前への現状復帰は紛争をいつそうひどくする可能性がある」とし、日本と中国間に満州に関する新たな協定を勧告するなど妥協的な内容だつた。

この事件は張作霖事件の延長線上にあった。

三年前、北京からの帰途にあった張作霖を同じ口で爆殺したとき、首謀者・河本大作（当時大佐）を「停職」という処分にとどめたため、ときの首相・田中義一は天皇から厳しく叱責され辞職を余儀なくされている。

これに対して柳条湖事件の板垣と石原は何の咎めも受かず、反対に陸軍にあって出世までした。一九二八年と一九三一年では陸軍内部の構造と意識にずいぶん違いがあった。

陸軍ばかりではなかった。

産業界の意を受け、あるいは財界に迎合した新聞が

——生命線・満蒙。

を煽り立てた。

一九三三年の二月二十四日、国際連盟総会はリットン調査団の報告書に基づき、日本帝国に対して満州から軍隊を撤回し満州の占領を中止するよう勧告する決議を可決した。それに異議を唱え、日本全権代表・松岡洋右が決然と退場したとき新聞各社は次のように報じた。

松岡の姿は、凱旋將軍のようだった。わが国は始めて、
「我は我なり」という独自の外交を打ち立てるにいたったのだ。

そればかりか、全国百三十二社が作成した共同声明を、そろって一面に掲載した。その声明文には日本電報通信社、報知新聞社、東京日日新聞社、東京朝日新聞社、中外商業新聞社、大阪毎日新聞社、大阪朝日新聞社、読売新聞社、国民新聞社、都新聞社、時事新報社、新聞連合社などが名を連ねていた。

満州の政治的安定は、極東の平和を維持する絶対の条件である。しかして満州国の独立とその健全なる発達とは、同地域を安定せしむる唯一最善の途である。東洋平和の保全を自己の崇高なる使命と信じ、かつそこに最大の利害を有する日本が、国民を挙げて満州国を支援するの決意をなしたことは、まことに理の当然といわねばならない。いな、ひとり日本のみならず、真に世界の平和を希求する文明諸国は、ひとしく満州国を承認し、かつその成長に協力するの義務ありというも過言ではないのである。

然るに国際連盟の諸国中には、今なお満州の現実に関する研究を欠き、従って東洋平和の随一の方途を認識しないものがある。われ等は、かかる国々の理解を全からしめんことを、わが当局者に要望すると共に、いやしくも満州国の厳然たる存立を危うするがごとき解決案は、たといいか

なる事情、いかなる背景において提起されるを問わず、断じて受諾すべきものにあらざることを、日本言論機関の名においてここに明確に声明するものである。

新聞が変節したのである。

三

橋本欣五郎という陸軍大佐がいた。

一八九〇年(明治二十三)福岡県に生まれ岡山で少年時代を過ごした。陸軍士官学校二十三期卒、一九二〇年陸軍大学校を出て満州里特務機関長を務めた。二七年から三年間、トルコ公使館付武官として勤務し、三〇年参謀本部ロシア班長となった。

このとき彼は、陸軍省の佐官級若手士官を集め、「桜会」を結成した。北一輝や大川周明らと交流し、政府の転覆を計画した。大川を通じて陸軍大臣・宇垣一成、軍務局長・小磯国昭、軍務課長・永田鉄山などを説かしめ、クーデター後、軍部独裁政権の首班となる内諾を得た。

しかし橋本の計画は、途中で宇垣が及び腰になったために頓挫し、陸軍省は首謀者を左遷もしくは予備役に編入してウヤムヤにした。

いわゆる「三月事件」である。

これを機に橋本はいったん退役したが、のち応召し野戦重砲第十三連隊長、一九四二年衆議院議員に当選して終戦となった。A級戦犯として終身刑の判決を受けたが五五年に出獄した。五七年没。享年六十七。

このとき内閣および陸軍省が毅然たる態度で首謀者たちを処罰していれば、あるいは関東軍の暴走を阻止できたかもしれないなかった。また「柳条湖事件」の首謀者を野放しにしていなければ、十月事件——荒木貞夫中将を擁立した大川周明らによるクーデター未遂計画——も起こらなかったといわれている。

一九三二年二月、井上準之助が暗殺された。享年六十三。同年三月、三井合名会社理事長の団琢磨が射殺された。

享年七十四。

この二つの暗殺事件は、史上、「血盟団事件」と称される。

五・一五事件はこの二か月後に起こった。

首相犬養毅、射殺。

「話せば分かる」

銃口を向けた将校に語りかけたこの言葉が最後になった。

「問答無用」

銃口を向けた青年将校の言葉が聞こえたかどうか。享年

七十七。

代わって内閣首班に指名されたのは海軍大将で朝鮮総督の齋藤実だった。齋藤は政党、軍部、官僚の「三者一体」
「挙国一致」内閣を標榜したが、結局は三者の勢力バランスを保つのが精一杯だった。

一九三五年八月、陸軍省内で軍務局長永田鉄山が斬殺されるという事件が発覚した。下手人は相沢三郎という陸軍中佐だった。

斬殺された永田は「統制派」と称された陸軍省エリートで組織する「桜会」の代表格、相沢が属したのは現場諸部隊を指揮する青年将校が中心の「皇道派」だった。皇道派は思想的には観念的天皇中心主義、天皇親政を理想とする主張だった。つまりこの事件は、統制派と皇道派の対立が背景にあった。

統制派は三月事件の頓挫を経て、合法的手段による軍事政権の樹立を目指していた。これに対して皇道派青年将校たちは、統制派がいうところの「合法的手段」が政治権力を欲するだけの欺瞞に見えた。

その欺瞞のために摩擦が激しさを増している満州、中国に駆り出されるのは自分たちであることに、彼らは焦燥感を募らせた。ことに皇道派が危機感を強くしたのは、彼らが率いる兵卒の出身母体である農村の疲弊だった。

四

紡績業の不況で生糸の原料である繭の価格が下がっていた。加えて一九三一年に東北と北海道が冷害のために凶作となり、農民はワラビやトチ、ドングリなどで飢えをしのがなければならなかった。

三三年は豊作だったが、陸軍省が中国大陸に送り込んだ陸軍十二個師団七十万人分の食糧として大量の米を買い付けた結果、農漁村に十分な量の米が行き渡らなかった。翌三四年の秋はひどい凶作が全国を襲った。

このため、満足に食事ができない欠食児童が全国に二十万人も出た。農家が抱える負債総額は、一九三〇年に四十億円を超えていたといわれている。農村では自殺や娘の身売りが日常化していた。これに対して都市部では「東京音頭」が流行し、宝塚少女歌劇団がもてはやされ、軽演劇場「ムーランルージュ」が盛況となっていた。

凶作に飢える農村、軍需景気に沸く都市。

——都市の繁栄は、農村からの搾取で成り立っている。と、皇道派青年将校たちは考えた。

部下の兵卒たちがなけなしの給与から故郷に仕送りする姿を見て憤った青年将校は一人や二人ではなかった。農村

が疲弊すれば、わが帝国軍は弱兵の集まりになってしまふ。軍需景気の恩恵を受ける財閥を政府が擁護し、だけでなく癒着しているのであれば、農村は救われなければならないか。

一九三六年二月二十六日早朝、東京は前夜来の粉雪に覆われていた。

筆者は大学受験のおり、語呂合わせで「ヒドクサムイヒ」とその年を覚えた。

粉雪を蹴って、皇道派の青年将校が決起した。動いたのは第一師団と近衛連隊など千四百人の兵卒である。この中に落語家「柳家小さん」として知られる小林盛夫が、二等兵として混じっていた。

——命令で皇居の御門の前を機関銃で護っていた。何でも反乱軍が天皇さまを誘拐しにくるつてんで、そりゃおっかなかったよ。そしたらさ、おいらたちが反乱軍だつていうじゃない。何がなんだか分からなくなったよね。

弟子の「さん治」（のち真打に昇進して「小三治」という人が筆者の高校の先輩で、文化祭で一席打ったとき、そのような話をしていたことを覚えている。

事件の直接の引き金となったのは、皇道派青年将校に近しい心情を抱いていた中佐相沢三郎が統制派の陸軍軍務局長（少将）永田鉄山を陸軍省内で斬殺したことにあつた。そ

の軍法会議に弁護人として立つた皇道派青年将校たちは、裁判を通じて意思を統一し結束を固めていった。

陸軍の主導権を握っていた統制派は、彼ら「皇道派」を国内に置いておくのは危険と見た。皇道派の中心的人物たちが所屬する第一師団を満州に派遣することを決めたのが、決起を早めた原因だつた。

・齋藤実（内大臣）、斬殺。享年七十八。

・高橋是清（大蔵大臣）、射殺。享年八十一。

・渡辺錠太郎（陸軍教育總監）、射殺。享年六十二。

・鈴木貫太郎（侍従長）、重傷。

死亡が伝えられた岡田啓介首相は、官邸の一室に潜んでいて無事だつた。

別荘に滞在中だつた牧野伸顕（前内大臣）、西園寺公望（元老）は避難して事なきを得た。

皇道派の青年将校たちは溜池の山王ホテル、料亭「幸楽」および首相官邸を占拠し、大将・真崎甚三郎を首班とする国家改革内閣を樹立することを訴えた。霞ヶ関、永田町、溜池の一带に非常線を張り、全国の同志の決起を促したが、その結果は無残な失敗に終わった。

クーデターの首謀者である野中四郎（大尉）は短銃で自

決、安藤輝三（大尉）、栗原安秀（中尉）、坂井直（中尉）など十七人が「逆賊」の名のもとに、上告なし、弁護士なし、非公開という軍事法廷で刑を宣告され、時をおかず死刑に処せられた。

統制派は皇道派を強引に封じ込めたが、それがやがて二・二六事件の青年将校たちを「憂国の士」として礼賛する風潮を生み出した。

この年の一月、日本はロンドン軍縮会議からの離脱を表明し、一方で労働運動や自由主義・共産主義への思想弾圧を強めていた。中国の山東半島と満州に、日本の産業界は莫大な投資を行い、何百万人もの開拓民を送り込んでいた。軍事力を背景にした帝国主義の矛盾が露呈し、これが政策の硬直化を生み、大日本帝国は二進も三進も行かない自縄自縛の閉塞感に陥っていく。以後、日本は軍国主義の道をまっしぐらに進むことになるのだが、二・二六事件に際して戒厳司令部が発した「今カラデモ遅クハナイ」は、日本の針路を意味していた。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

満州 Manzhou : 現在は中華人民共和国東北地区から内モンゴル自治区北東部の総称で、語源はかつてここに仏教国「金」という国家を建てたツングース系の女真族が自らを「文殊菩薩の子孫」の意味で「マンチュウ」と称したことに発する。

張学良 ちょう・がくりよう／1898～2001。日本軍によって爆殺された満州軍閥首領・張作霖の息子で、中国国民政府の陸海空軍副司令だったが、満州事変により満州を追われた。一九三六年十二月、蒋介石を西安に監禁して抗日民族統一戦線を実現して日中戦争を中国軍有利に導いた。のち蒋介石軍に捕われ第二次大戦後も台湾に軟禁された。九三年軟禁を解かれ移住先のハワイの病院で死去した。中華人民共和国では「千古の功臣」「民族の英雄」という高い評価が定着している。

田河水泡 たがわ・すいほう／1899～1989。本名は高見沢伸太郎。東京に生まれ日本美術学校を出た。画家を目指したが生活のために新作落語の台本を書くなどしているうち一九三一年「少年倶楽部」(講談社)に漫画「のらくろ」を発表し人気を得た。「サザエさん」の長谷川町子は弟子。

のらくろ 田河水泡が一九三二年から雑誌「少年倶楽部」に連載した漫画で、陸軍を舞台に黒い野良犬の「のらくろ」がブル連隊長のもとで出世していく過程を描いた。太平洋戦争で軍を擲捨するものとして執筆禁止処分となった。終戦後、軍国主義色を払拭し復活した。

リットン卿 Victor Alexander Lytton／1876～1947。小

説『ボンペイ最後の日』、名句「ペンは剣よりも強し」で知られる作家エドワード・ジョージ・ブルワーズ・リットンの孫。国際連盟イギリス代表を務めた。

調査団の陪席者 日本からは外交官の吉田伊三郎、中国は外交官の顧維鈞が参加した。顧維鈞については第四十八補注。

板垣征四郎 いたがき・せいしろう／1885～1948。一九三二年、関東軍司令部付となつて表立った活動を控えたが、三七年には第五師団長として復活し、三八年には第一次近衛内閣で陸相に抜擢された。三九年支那派遣軍総参謀長、四一年に陸軍大將に上り朝鮮軍司令官、四五年に第十七方面軍司令官、第七方面軍司令官で終戦を迎え、A級戦犯として四八年絞首刑に処せられた。

石原莞爾 いしはら・かんじ／1886～1949。一九三二年にジュネーブ軍縮会議の随員となり、三五年に陸軍参謀本部作戦課長を務めた。のち東条英機と意見が合わず、四一年に予備役に編入された。翌年、立命館大学教授となり四九年に没した。

張作霖 第四十八補注参照

河本大作 第四十八補注参照

松岡洋右 まつおか・ようすけ／1880～1946。国際連盟日本全権として同連盟からの日本脱退を宣言したのち、一九四〇年発足の第二次近衛内閣で外相を務めた。「大東亜共栄圏」構想を打ち出してイタリア、ナチス・ドイツと同盟を結んだ。第二次大戦後、A級戦犯として逮捕されたが東京裁判の最中に病状が悪化し東大病院で死亡した。死去の直前、「日独伊三国同盟は一生の不覚だった」と漏らした。

北一輝 きた・いっき／1883～1937。本名は「北輝次郎」といった。新潟県の佐渡に生まれ、一九〇五年に上京して幸

徳秋水、堺利彦などと交流した。農村の疲弊と都市の繁栄を社会主義的手法で改革しつつ天皇制を軸とする国家体制を志向し、陸軍青年将校の精神的な支えとなった。二・二六事件で反乱将校に助言と教唆を与えた罪で軍法会議にかけられ刑死した。

大川周明 おおかわ・しゅうめい／1886～1957。山形県に生まれ東京帝国大学を出て陸軍参謀本部の依頼で翻訳の仕事をした。一九一八年満州鉄道に入り北一輝、満川亀太郎などと交流した。三二年五・一五事件に関与したとして禁固九年の判決を受けたが三九年東亜経済調査局最高顧問。第二次大戦後、A級戦犯として逮捕されたが精神障害を起し免訴となった。

宇垣一成 うがき・かずしげ／1868～1957。岡山県に生まれ陸軍士官学校第一期、陸軍大学校卒。一九二四年清浦圭吾内閣、加藤高明内閣、若槻礼次郎内閣で陸相を務めた。師団縮小と兵制近代化に努める一方、浜口雄幸内閣のとき陸軍内の「宇垣閥」の領袖として財界から首相に推された。第二次大戦後、五三年参院議員となった。

小磯国昭 こいそ・くにあき／1880～1950。栃木県に生まれ陸軍士官学校十二期卒。一九一六年満州独立を画策し三二年陸軍省次官を経て関東軍参謀長、第五師団長、朝鮮軍司令官などを歴任した。三九年平沼騏一郎内閣で開拓相として南方進出を推進し四二年朝鮮総督となった。東条英機内閣のあと首相に任じられ対中国和平工作に失敗した。ポツダム宣言無条件受諾後、A級戦犯として逮捕され終身刑となった。

永田鉄山 ながた・てつざん／1884～1935。長野県に生まれ一九一三年ドイツで軍事を学んだ。二八年第三連隊長、三〇年陸軍省軍務局軍事課長、三二年少将に進み参謀本部第二部長、

歩兵第一師団長を経て三四年軍務局長。統制派の中心人物と目され皇道派の教育総監真崎甚三郎を罷免したため三五年陸軍省内で相沢三郎中佐に斬殺された。

荒木貞夫 あらき・さだお／1877～1966。東京に生まれ陸軍士官学校九期、陸軍大学校卒。一九一八年シベリア出兵で特務機関長、憲兵司令官、陸軍大学校長、第六師団長、三一年犬養毅内閣で陸相。皇道派青年将校に担がれ二・二六事件では反乱将校たちに同情的な姿勢を見せたが、軍法会議の査問で翻意した。三八年第一次近衛文麿内閣で文相となり軍国主義的教育を推進した。

団 琢磨 だん・たくま／1858～1932。福岡藩(福岡県)藩士の神屋家に生まれ団家の養嗣子となった。一八七一年(明治四)岩倉使節団に同行してアメリカ合衆国に渡り、マサチューセッツ工科大学で鉱山学を学んだ。帰国後、大阪専門学校教授、東京帝国大学助教などを経て工部省工部鉱山寮に技師として入り、三池炭坑が三井鉱山に払い下げられたのに伴い三池炭坑事務長となった。九四年三井鉱山合名会社専務理事、一九一一年三井鉱山会長、一四年三井合名会社理事長として政財界に力を振るった。

犬養 毅 いぬかい・つよし／1855～1932。岡山県に生まれ慶応義塾に在学中、報知新聞記者として西南戦争に従軍した。八一年統計院権少書記官、八二年立憲改進黨に参加し自由民権運動を推進し九〇年第一回総選挙で衆院議員となった。九六年進歩党を結党、九八年自由党と合併して憲政党党首となり第一次大隈重信内閣で文相、一九一〇年又新会と合同して立憲国民党を組織した。孫文の辛亥革命を支援し、一七国民党総裁、二〇年ごろ

から普通選挙運動の表に立ち二四年第一次加藤高明内閣で通信相、二九年に引退を表明したが二二年難局を乗り切るため推されて首相となった。戦後の吉田茂内閣法相の犬養健(1896~1960)は息子、評論家の犬養道子(1921~2017)は孫。

斎藤 実 さいとう・まこと/1858~1936。陸前藩(岩手県)に生まれ、一八七九年海軍兵学校を出てアメリカ合衆国に留学した。八八年海軍参謀本部、海軍大臣官房人事課長などを経て日清戦争以後しばらく戦艦の艦長を務めた。九八年山本権兵衛海相のとき海軍省次官、一九〇六年西園寺公望内閣で海相となった。日露戦争では海軍拡張計画を推進し一九二二年大将に進んだ。シーメンス事件で海相を辞任し、一九年朝鮮総督、二七年ジュネーブ軍縮会議で日本全権、三二年五月の五・一五事件で犬養内閣が倒れた後組閣し三四年の帝人事件で引責辞任。のち内大臣に就任し、二・二六事件で殺害された。

相沢三郎 あいざわ・さぶろう/1889~1936。宮城県に生まれ陸軍士官学校二十二期卒。青森の歩兵第五連隊大隊長のと き皇道派に加わり、三五年皇道派の教育総監真崎甚三郎が罷免されたことを怒って統制派の永田鉄山を斬殺した。軍法会議を経て三六年七月死刑となった。

宝塚少女歌劇団 一九一三年に箕面有馬電気軌道(現阪急電鉄)が開通したとき、乗客を増やすために保養施設・遊園地「宝塚新温泉」をオープンした。その呼びものとして少女のみによる「宝塚唱歌隊」を編成したのが始まりとなった。歌唱だけでなく演劇を加え一四年四月に初めて公演を行った。一九年に宝塚音楽歌劇学校を設立し、それを母体とした「宝塚少女歌劇団」を発足させた。「レビュー」を取り入れ二七年に上演された「モン・パリ」で

唄われた「うるわしの思い出モン・パリ」が流行歌となった。

ムーランルージュ 一九三一年東京・新宿に開業した劇場で独自の劇団と脚本製作部門を持っていた。上演された喜劇はおおいに繁盛しこれを模倣した大阪吉本興業、浅草花月劇場、古川ロッパ一座、エノケン劇場、シミキン一座、水の江滝子一座などを生むきっかけとなった。当時、新宿は映画館、寄席などが数多くあって、芸能や文学に憧れる青年が集まっていた。太平洋戦争の戦災で焼失し四七年に再建され、ここから森繁久彌、由利徹、三崎千恵子、望月優子などが出た。

二・二六事件の兵士たち その中に、やがて日本ワットソン統計会計機械の社員として活躍する島村浩もいた。彼は千葉県習志野にあった戦車部隊に所属し、皇居二重橋の前で機関銃を構えていたが、小さんと同じように、「自分たちが反乱軍とされていることに驚いた」と後日語っている。

柳家小さん 江戸中期から続く落語会の名跡で、最も著名なのは三代目(本名豊島銀之助、1857~1930)である。ここでいう小さんは五代目で、本名は「小林盛夫(1915~2002)」といった。一九三三年「柳家栗之助」の名で初高座を踏んだ。七二年日本落語協会会長。三代目小さんの芸風を受け継ぎ戦後の落語界にあつて桂文楽、三遊亭圓生、古今亭志ん生の三名人に次ぐ最後の名人とされる。

柳家小三治 やなぎや・こさんじ。本稿に登場する小三治は十代目。本名は郡山剛藏(1939~2021)といった。二〇一〇年日本落語協会会長となった。

高橋是清 たかはし・これきよ/1854~1936。幕府御用絵師の家に生まれ仙台藩足輕高橋家の養子となった。一八六五年

江戸に出て英語を学び六七年渡米。六八年帰国し通訳・翻訳業を営んだのち農商務省に入った。八九年初代特許局長、九二年日本銀行に入り九五年横浜正金銀行に移って副総裁、一九二一年日銀総裁。一三年山本権兵衛内閣、一八年原敬内閣で蔵相、二二年首相。一度は政界を引退したが二七年の金融恐慌に際して再び蔵相に就任し経済の混乱終息に見通しがついたとして四十二日で辞任した。政府の財政難を日銀発行の公債で賄う新手法で乗り切り軍事費の圧縮に努めた。二・二六事件で殺害された主因はここにあった。

渡辺錠太郎 わたなべ・じょうたろう／1874～1936。愛知県に生まれ一九〇三年陸軍大学校を出て二〇年歩兵第二旅団長、二五年陸軍大学校校長、二六年第七師団長、二九年航空本部長、三〇年台湾軍司令官などを歴任し大将。三五年名古屋市の演説会で軍の中立性を訴え、国体明徴論や天皇機関説排撃論を批判した。これが皇道派青年将校の反発を買ひ、二・二六事件で殺害対象者リストに挙げられた。

鈴木貞太郎 すずき・かんたろう／1867～1948。大阪に大阪に生まれ一八八七年海軍兵学校卒、一九〇一年ドイツ駐在武官などを経て一四年海軍省次官、一八年海軍兵学校校長、第二・第三艦隊司令官のち大将に昇進し二四年連合艦隊長官となった。二九年に退役して侍従長兼枢密院顧問、二・二六事件で重傷を負ったが四〇年枢密院副議長、四四年同院議長から四五年四月首相。ポツダム宣言無条件受諾の道を開いた点で評価される一方、四五年六月に天皇から早期終戦の指示を受けていながら実行しなかったことが批判されている。

岡田啓介 おかだ・けいすけ／1868～1952。福井県に生

まれ一八八九年海軍兵学校を出て日清戦争時少尉、日露戦争では戦艦「春日」艦長を務めた。日本海軍に水雷術を導入した。一九一三年海軍省に戻り人事局長、海軍艦政本部長、次官を経て二四年大将、同年連合艦隊司令長官に就任し二七年田中義一内閣、三二年斎藤実内閣で海相。三四年首相となり二・二六事件では死亡と報道されたこともあった。太平洋戦争開戦を阻止できず、四三年から東条内閣の打倒と和平工作を指導した。終戦時内閣書記官の迫水久常は娘婿である。

牧野伸顕 まきの・のぶあき／1861～1949。薩摩藩(鹿児島県)に生まれ一八七一年大久保利通の遣米使節団に同行してアメリカに留学した。七九年外務省に入り憲法制度調査に参加したことから伊藤博文の知遇を得た。第二次西園寺内閣で農商務相、第一次山本内閣で外相。シベリア出兵に反対の立場を取り、一九一九年パリ講和会議で日本全権、二一年宮内相、二五年内大臣。軍部の台頭に対抗して重臣会議のウエイトを高めることに尽力した。その娘婿が吉田茂である。

西園寺公望 さいおんじ・きんもち／1849～1940。京都の公卿・徳大寺家に生まれ西園寺家の養子となった。戊辰戦争では山陰道鎮撫総督、会津討伐越後口大參謀を務めた。のち、七一年パリに留学した。八〇年帰国しパリで知己となった中江兆民と「東洋自由新聞」を創刊、八五年から九一年にかけてヨーロッパ列国公使を務めた。第二次伊藤博文内閣で外相、第三次伊藤内閣で文相、第四次伊藤内閣で首相臨時代理となり、一九一九年元勳。昭和初期の内閣首班を指名したが、二・二六事件で限界を感じ、内大臣と協議のうえ首班指名を行うようになった。日独伊三国同盟に反対したが四〇年静岡県興津の別邸で病死した。

山王ホテル 一九三二年、東京・赤坂の日枝神社下に開業した。地下一階にアイスリンクを備えていた。一九四五年八月、ポツダム宣言無条件受諾後、連合国軍総司令部に接収された。その跡地は「山王パークタワー」となっている。

料亭「幸楽」 山王ホテルの隣にあった高級料亭で、政財界の会合の場として使われた。のちにその跡地がホテルニュージャパントなり、現在は「プリデンシャルビル」となっている。

真崎甚三郎 まさき・じんざぶろう／1876～1956。佐賀県に生まれ一九〇七年陸軍大学校を出た。一四年歩兵第四十二連隊大隊長、一五年久留米捕虜収容所所長、二〇年陸軍省軍事課長、陸軍士官学校校長、二七年第八師団長、二九年第一師団長、三一年台湾軍司令官、三二年参謀次官、三三年大将。荒木貞夫とともに皇道派の中心にあつて、二・二六事件のとき密かに組閣の準備を進めたが、クーデター失敗で軍法会議にかけられた。反乱幫助罪の適用は免れたが以後退役し、日中戦争、第二次大戦を通じて沈黙を貫いた。

決起部隊の終焉 二・二六事件勃発の報せを聞いた昭和天皇は「朕自ら近衛師団を率ゐこれが鎮定に当たらん」と述べ、可及的速やかな鎮圧の意向を示したという。二十八日午前五時過ぎ、「戒厳司令官ハ三宅坂付近ヲ占拠シアル將校以下ヲ以テ速ヤカニ現姿勢ヲ撤シ各所属部隊ノ隸下ニ復帰セシムヘシ」の奉勅命令が出た。

二十九日、部隊上空を飛ぶ飛行機から「下士官兵ニ告グ、今カラデモ遅クハナイカラ原隊へ帰レ。抵抗スル者ハ全部逆賊デアアルカラ射殺スル。オ前達ノ父母兄弟ハ国賊トナルノデ皆泣イテオルゾ」という文面のチラシが撒かれた。また九段下の軍人会館の戒厳司令部からも同様の放送が流れ反乱は一気に終息していった。

053 大陸

第五十三

大陸

一

日本ワットソン統計会計機械株式会社が活動を開始したのは二・二六事件の翌年、一九三七年だった。この国が軍国主義に大きく転換したときに、自由・平等を標榜する国の最新機械装置メーカーが始動したのは皮肉な回り合せだった。

軍国主義が顕在化した事象の第一歩は、この年の一月、廣田弘毅内閣が瓦解したことだった。引き金となったのは陸軍大臣・寺内寿一のゴリ押しである。

第七十回帝国議会で立憲政友会の衆議院議員（前議衆院議長）浜田国松が二・二六事件以降の軍部の政治干渉を批判する演説を行った。

これに対して寺内が
——軍人を侮辱している。

と反駁した。

浜田が

——速記録を調べて私が軍を侮辱する言葉があるなら割腹して君に謝罪する。なかったら君が割腹せよ。

と激しく寺内に詰め寄り、寺内が壇上から浜田を睨みつける事態となった。憲政史上に残る「腹切り問答」である。

このあと寺内は廣田首相に

——政党は時局の認識が甘い。

と議会の解散を要求した

議會を解散する・しないは首相（閣議）の専権事項という昨今の常識に従えば、廣田は寺内を罷免すればよかったところが大本国憲法に

「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」

とあって、首相といえども陸海軍の人事に口を挟むことができなかった。

しかし議會を解散する大義がない。となると寺内は従わない。つまり廣田の選択肢は内閣総辞職しかなかった。

後任に指名されたのは宇垣一成だった。寺内の九歳年長で、長州閥の流れを組む宇垣派の頭目である。かつ、予備役編入を忌避する寺内の希望を叶えたことがあった。元老・西園寺公望は寺内以下の陸軍主戦派を抑えることができると考えた。

ところが陸軍大臣が決まらなかった。というのは、陸軍大臣については三長官合意を必要とする慣例があった。だ

けでなく、宇垣の打診に小磯国昭（当時陸軍中將・朝鮮軍司令官、のち首相）が答えたように、

——東京に向かう途中で『予備役編入』の通知を受け取って無駄骨になる。

という奥の手があった。

宇垣は自分が陸相を兼任することも考えたが、前年五月に復活した

——軍部大臣は現役武官に限る。

とする制度が壁になった。軍部主導の政治を目指す参謀本部の石原莞爾（大佐）らが、前陸相の寺内寿一（大將）、教育総監の杉山元（大將）や憲兵司令官の中島今朝吾（中将）を巧みに操縦した。

それを受けて誕生した林銑十郎内閣は、外務・文部の二大臣を林が兼任するにわか仕立てだったし、組閣後百二十三日で総辞職に追い込まれた。結果として近衛文麿に落ち着いたのは、近衛が平民出身の政党内でも軍人でもなく、後陽成天皇十二世の孫、藤原摂関家という血脈にあるからだった。

政治的なならみ合いで二進も三進も行かなくなったとき、この国は体温を持つ人ではなく、人のかたちをした形代（かたしろ）を推戴することが少なくない。

人形（ひとがた）で「とりあえず休戦」するのだが、秀

吉が三法師を担いだのと同じように、近衛内閣は陸軍の傀儡になってしまった。これを機に、日本は戦争に突入していく。

その直後、七月七日に北京郊外約十キロの盧溝橋というところで、日中両軍が武力衝突する事件が勃発した。「盧溝橋事件」である。

次いで八月十三日、今度は上海で日中両軍が交戦状態に入った。近衛内閣が「中華民国政府断固膺懲」の声明を出して中国との全面戦争に突入したのは十五日である。

十一月に入ってドイツが日中和平工作に乗り出したが、交渉が始まった十二月、南京攻撃に当たっていた日本軍が長江河畔に停泊していた軍艦「バナー」号、「レディバード」号を砲撃する事件が発生した。日本の軍事行動は国際連盟でも批難決議の対象となっていたから、この一件で第三国を仲介役とする和平交渉は頓挫せざるを得なくなった。

日本軍は十二月十三日、当時の中国の首都である南京を占拠して当初の目的を達成した。しかし中国国民政府は首都を武漢に移して対日徹底抗戦の姿勢を崩さなかった。このとき日本政府が矛を収めていれば、後々の大きな不幸は避けることができたかもしれない。

だが南京占領軍が多数の中国人軍民や婦女子を暴行虐殺するという「南京事件」が発覚した。だけでなく、近衛内

閣は翌三八年一月十六日、

——国民政府を相手にせず。

として和平交渉を打ち切った。これによって事態は決定的になってしまふ。

「自由」と「民主」を標榜するアメリカ (A = America) を軸に、イギリス (B = Britain)、中国 (C = China)、オランダ (D = Dutch) の四カ国は結束を強め、対日共同戦線、いわゆる「A B C D包囲網」を形成していく。それは、九九%以上を海外に依存していた石油が入らなくなることの意味していた。

一九三八年四月一日、近衛内閣は「国家総動員法」を公布し、五日には「電力管理法」を制定して電力の国家管理を実現した。日本軍は二十四個師団を投入して総攻撃を続け、五月に徐州、十月に武漢と中国各地を占領していった。だが国民政府は首都を重慶に移してなおも徹底抗戦を継続した。

二

一九三八年、欧州ではアドルフ・ヒトラー率いるナチス・ドイツ軍が三月にオーストリアを併合、十月にチェコのスデーデン地方に進攻して、英仏との緊張感を高めてい

た。ヒトラーは強力な統率力のもとに軍隊を機械化し、文字通り「疾風怒濤」(Sturm und Drang) の勢いでなだれ込んだ。

ドイツでは「クリスタルナハト」と呼ばれるユダヤ人迫害が激化しており、ドイツと国境を接するオランダやフランス、スイスなどにはユダヤ人難民が大量に逃げ込んでいた。

六月には中国共産党の毛沢東が「持久戦論」を発表して対日抗戦の継続を訴え、七月にはアメリカが「同義的対日禁輸」を決定した。アメリカはこのころから、大洋をはさんだ東西二つの大陸の動き——ナチス・ドイツと大日本帝国の軍事的膨張——にどう対応すべきか、シミュレーションをスタートさせていた。

アメリカが取り組んでいたのは兵器の開発ばかりでなかった。

そう書くと、本稿の本旨から、

——ははくん、さては計算機だな。

と推測する向きがあるかもしれないが実はそうではない。

I B M社が陸軍に計算機の活用を提案するのは一九四〇年の七月だし、陸軍がペンシルベニア大学のムーア・スクールと砲弾彈道計算用の計算機開発にかかる契約を結ぶのは一九四三年六月である。

連邦政府も軍も、一九三七年・三八年の時点では計算機に思いが至っていないかった。彼らが着目したのは計数的経営手法、つまりランチェスターの法則だった。その背景には、いずれ勃発するかもしれない世界規模の戦争では（かわらざるを得なくなるとして、だが）、大規模なプロジエクトを運営する手法を採用すべきだ、という考えがあった。戦争を数値化しようというのである。

この話を聞いたら、当時のナチス・ドイツ関係者は

——数式で戦争ができるか。

と鼻で笑ったに違いない。

まして大日本帝国の軍関係者は

——精神がなつたらん。

と怒鳴ったかもしれない。

実際、翌三九年の二月、平沼騏一郎内閣は「国民精神総動員強化方策」を決定した。国民を総動員して対英米戦争に当たる準備を進める、というわけだった。

二月には早速、「鉄製不急品」の回収を開始した。寺院の鐘や台所の鍋釜が消えていった。これをきっかけに、巷間では「大東亜共栄圏」の言葉が頻繁に使われるようになっていく。

五月十一日、ノモンハンで勃発した日ソ軍の衝突で、日本帝国陸軍第二十三師団の東支隊が壊滅した。のちにいう

「第一次ノモンハン事件」である。

戦いは日本軍にとって初めて戦車対戦車の草原戦となったが、精銳を誇った関東軍の安岡戦車支隊はあつけなく壊滅し、歩兵部隊もソ連機甲師団の前に太刀打ちできないことが判明した。特に戦車は優劣の差が極端だった。

ただ一つ、優位であることが確認できたのは航空機だった。

同年五月二十日から月末までの戦いで、日本の航空機は攻撃してきたソ連軍機のうち五十九機を撃墜して損失ゼロ、六月二十二日にはソ連軍の百五十機との空中戦で四機を失ったものの撃墜五十六、さらに二十六日までに撃墜八十八を記録している。

このときソ連極東軍が保有していた航空機は約二千機、対して日本は三百四十機だった。質が数を制した。

優秀な航空戦力は、飛行兵の錬度と航空機そのものの性能によっていた。

満州で活躍したのは中島飛行機の「九七式戦機」（中島キ-27）である。また、三菱重工業の名古屋航空機製作所（名航）では、海軍から発注された次期主力戦闘機が完成しつつあった。

その年の七月、名航の堀越二郎が九二年の年月を費やし

て設計した海軍零式艦上戦闘機（零戦）の試験飛行が行われ、最高速度五百キロ／時という当時の戦闘用航空機としては最高記録を樹立していた。ちなみに「零式」は、海軍に制式採用された一九四〇年が皇紀二千六百年に当たっていたため、末尾の「〇」を取って名付けられた。

同じ月に日米通商航海条約の破棄が決まった。九月にはドイツがポーランドに侵攻して第二次世界大戦の欧州戦線が火蓋を切り、日本では「贅沢品は敵だ！」の合言葉のもとで、米、砂糖、マッチ、ガソリンなどの販売・使用が規制されていた。

戦時体制の強化を受けて、民間では輸入品の排斥が激化した。丸善や黒澤商店、関東大震災のあと黒澤商店からのれん分けで独立した日本事務器商会（のち日本事務器）といった輸入事務機器の販売会社は、国産化に移行せざるを得なかった。

日本事務器商会は内紛もあって一九三二年に分裂し、創業者の田中啓次郎は代表者の座を降りていた。田中はこのために東京・荻窪の私邸を抵当に入れて資金を工面したが、それでもなお五万円の借金が残っていた。

田中は日本事務器商会から離れ、くろがね工作所（大阪市西区）社長の三村小太郎の支援を受けながら、帳簿型ビジュアルレコーダー（カード式情報記録装置）「バイコ」の

開発に成功した。事務機器の輸入が激減したことが幸いして、「バイコ」は増産に次ぐ増産となった。当初の販売目標は月間三百台だったが、一九四一年には年五万台を販売したという。陸海軍の工廠が大口取引先だった。

三

排斥されたのは製品だけではなかった。

外来語、特に英語が目の敵になった。

明治期に欧米から輸入された文化は、例えば正岡子規がベースボールを「野球」と翻訳するなど「日本化」されていた。ちなみに現在、われわれが何気なく使っている文章の作法は、この人が生み出した。

維新以後も日本語の文章表現は旧態依然たる擬古文ないし漢文読下しの表現で行われていた。すなわちそれは旧体制の「家」を機軸とする思想の名残であって、日常に交わされる会話と大きく乖離していた。彼はそれを「日記」というかたちで打ち破った。誰もが自分の言葉で自分を表現する手法が提示され、庶民が

——私は……。

で語り始めた。それが「自我」というものを育んだ。夏目漱石『坊ちゃん』『我輩は猫である』、伊藤左千夫『野菊

の墓』、長塚節『土』等々は、すべてこの人から出た。

その子規は東京帝大時代、神田錦町の旧開成所跡にあったグラウンドで野球を楽しんだ。その際に編み出した用語が現在も使われている。ベース⇨「塁」、フライ⇨「飛球」、キャッチャー⇨「捕手」、ファール⇨「邪飛」、デッドボール⇨「死球」、ホームラン⇨「本塁打」、ヒット⇨「安打」、バッター⇨「打者」、ライト⇨「右翼手」、センター⇨「中堅手」、レフト⇨「左翼手」、ショート⇨「遊撃手」……。

そこには知恵とセンスがあった。

ところが戦時体制下で起こった英語の排斥は、「アウト」を「ダメ」、「セーフ」を「ヨシ」と言い換える類で、知的センスがまったくなかった。暴力をもって文化を排斥するに等しかった。英語を使ったり、欧米の事情に詳しいというだけで、白眼視する風潮が蔓延し始めた。

アメリカを敵視する風潮は産業界でも同様だった。

軍需動員に伴って、資本の鎖国が始まった。国内電子機器メーカーで唯一の日米合弁会社であった日本電気は、一九三七年十二月に資本金を一千二百五十万円から三千万円に増資して、米インターナショナル・スタンダード・エレクトロニクス（ISE）社の保有株式比率を三六・九%に下げた。さらに四一年八月に再度、資本金を五千万円に増資して、ISE社の出資比率を一九・七%に下げるとともに、

住友グループが四六・一%を占めるようになった。

四一年十二月八日のインドシナ攻撃と真珠湾攻撃で、ついに米英蘭三国との戦争に突入すると、日本政府は同月二十三日、「敵産管理法」を公布・施行した。これによってISE社の保有する日本電気株は凍結され、日本電気は完全に住友本社の統括下におかれることになった。

翌四二年二月、社名を「住友通信工業」に改め、全工場が軍需工場に指定された。同社は政府から電探（レーダー）の研究開発を指令されていたが、四一年六月に川崎市生田に研究所生田分室を開設している。同分室の跡地は、のちに専修大学生田キャンパスとなった。

また工場では無線通信機、電波探知機、高射砲用標定機、方向探知機、水中探音機など無線関連装置を生産した。一九四〇年度の生産高四千五百三十九万円のうち、軍需の比率は四三%だった。

これが四一年度になると五千四百八十七万円のうち六四%に跳ね上がり、四二年度は七千四百七十三万円のうち八〇%、四三年度は一億七千二百四十六万円のうち九四%、四四年度は三億二千四百六十八万円のうち九六%となっている（終戦直後、住友通信工業が連合国軍総司令部の経済科学局に提出した記録による）。

また、日本軍の展開に伴って、三七年十二月に「満州通

信機器株式会社」を設立したほか、四一年十二月に接收した「中国電気公司」の経営委託を受け、さらに四三年五月にはジャワ島バンドンにあったオランダ領インドネシア政府保有の無線研究所と付属工場の経営を委任され、これを「ジャワ無線機器製作所」と改称した。

ジャワ無線機器製作所は当初、現地日本軍の無線局や送信所の機械設備を修理・補給するだけだったが、やがて真空管や無線装置などを現地で生産するようになった。従業員は日本軍に降伏したオランダ人や現地人など一千三百五人、うち日本人は二十一人だった。

補注

廣田弘毅 ひろた・こうき／1878～1948。福岡市出身の外交官で、一九二六年オランダ公使、三〇年駐ソビエト連邦特命全權大使、三三年齋藤実内閣、三四年岡田啓介内閣で外務大臣を経て三六年三月内閣総理大臣となった。

寺内寿一 てらうち・ひさいち／1879～1946。東京府生まれ、東京府育ちだが山口県出身となっている。第十八代内閣総理大臣などを歴任した元陸軍大將寺内正毅の長男で、皇族以外では陸海軍を通して親子二代で元帥府に列せられた唯一の人物である。陸軍大臣在任時は、衛生省(厚生省、現・厚生労働省)の設立を提唱。太平洋戦争期には、編成時から一貫して南方戦線の陸軍部隊を統括する南方軍総司令官を務めた。

浜田国松 はまだ・くにまつ／1868～1939。一九〇四年(明治三十七)三重県郡部から衆議院議員となり以後十二回連続で当選した。甲辰俱樂部、政友俱樂部、猶興会、又新会を経て、一九一〇年(明治四十三)立憲国民党の結成に参加した。一九一七～一九二〇年衆議院副議長、一九三四～一九三六年衆議院議長を務めた。最後まで自由主義・反ファッショの姿勢を貫いた。

林銑十郎 はやし・せんじゅうろう／1876～1943。金沢市に生まれ一八九六年陸軍士官学校卒、一九〇三年陸軍大学校を出て日露戦争後、連隊長、旅団長、陸軍大学校長、教育総監部本部長、近衛師団長、三〇年朝鮮総督。三二年大將に進み、三四年岡田啓介内閣で陸相。このとき真崎甚三郎を陸軍教育総監から罷免し二・二六事件の遠因を作った。三七年首相となったが四か月

で辞任し 四二年大日本興亜同盟総裁。満州事変のとき一存で朝鮮軍を満州に越境させるなど何かと問題の多い軍人だった。

盧溝橋事件 一九三七年七月七日夜、北平(北京)郊外の豊台に駐屯していた支那駐屯歩兵第一聯隊第三大隊第八中隊の将兵が盧溝橋付近の河原で夜間演習中、実弾を撃ち込まれ、点呼時に兵士の一人が所在不明だったため、中国側の攻撃があったと判断して起きたと言われる。比較的小規模な戦闘が繰り返された後、九日には中国側からの申し入れにより一時停戦状態となった(Wikipedia「盧溝橋事件」)。

行方不明とされた兵卒は志村菊次郎という初年二等兵だった。このとき伝令を務めていた彼は「第一小隊に戻ろうとしたが方向を失ってしまった」と後述している。のちビルマ戦線で戦死した。

日本の支那駐屯歩兵第一連隊が首謀者と目した宗哲元はこのとき北京に赴いていて事件のことを知らされ大いに慌てた。長く真犯人は不明とされてきたが、のち中国共産党が劉少奇(Liu Xiaoping)／1898～1969)とその一派が行ったことを正式に認めた。

宗哲元 Song Zheyuan／そう・てつげん／1885～1940。盧溝橋事件のとき、国民政府軍第二十九軍長だった。三二年察哈爾省政府主席、三五年冀察政務委員会委員長を経て三七年に第一戦区副司令長官兼第一集團軍総司令となった。しかし病のため三八年退役し、そのまま病没した。死後「第一級上將」の位を贈られた。

パネー号 日本軍の侵攻から在中國アメリカ人を保護する目的で南京から五十キロほど離れた揚子江岸に停泊していたアメリカ砲艦で、日本軍が誤って砲撃し沈没させた。艦長はのちに太平洋艦

隊を指揮したスプルーアンスだった。

南京事件 中国では「南京大屠殺」、欧米では「Nanking Atrocities」
 「Rape of Nanking」と呼ばれた。

一九三七年十二月十三日、中国国民政府の首都南京市を占領した日本帝国陸軍の第十軍が六週間にわたって掃討作戦を展開した。その際、多数の中国軍捕虜、敗残兵、便衣兵及び非武装市民を不法に殺害したとされる。大日本帝国陸軍は移動中に上海、蘇州、無錫、嘉興、杭州、紹興、常州などでも捕虜や市民への虐殺と略奪を続けていた。欧米ではシカゴ・デイリー・ニュースやニューヨークタイムズ、中国では大公報などが現地情報として報道しており、当時から国際的な非難が集中した。

欧米報道機関が用いた写真の中には南京事件と関係のないものや実態と異なる作爲的なものが混入している。しかし南京事件そのものが欧米報道機関や軍関係者および、中国共産党などによって捏造されたことにはならない。軍刀の試し斬りや婦女暴行、嗜虐的な拷問、大量殺戮などが行われたことは否定できない。

アドルフ・ヒトラー Adolf Hitler / 1889 ~ 1945。オーストリアのブラウナウに税関吏の子として生まれた。一九一三年オーストリア・ハンガリー帝国の兵役を逃れるためミュンヘンに移住し、第一次世界大戦にはドイツ帝国の志願兵として参加した。軍隊での階級は伍長で留まった。対ロシア戦線で使用された毒ガスによる負傷で視力は回復したものの声は元に戻らなかった。

このうち「ドイツ労働者党」に参加し独裁を認めるよう党綱領を改変し、党名を「国家社会主義ドイツ労働者党」と改めて二一年党首となった。イタリア・ファシスタ党ムッソリーニに憧れ武装蜂起を画策したが失敗、それを機に平和的政権奪取に転換し三

二年大統領選挙に出馬した。この選挙には敗れたが続く総選挙で第一党に躍進、ヒンデンブルク大統領はやむなく三三年ヒトラーを首相に任命した。

三三年三月「全権委任法」を制定、翌三四年六月軍事クーデターで政敵を一掃して独裁体制を固め三九年ポーランドに侵攻して第二次大戦の口火を切った。四〇年七月国防軍最高司令官に就任し戦争最高指導者となったがロンメルをはじめとする軍人にとつては「たかが伍長」に過ぎなかった。対ソ戦に失敗し連合国軍のノルマンディ上陸を許して以後は軍部のクーデターを恐れつつ、空想的な「革命的新兵器」に一縷の望みを託した。原子爆弾はその中の一つだった。

四四年七月クラウス・シェンク・フォン・シュタウフェンベルクによる暗殺未遂事件で数人の側近が死亡したがヒトラーは奇跡的に無傷だった。四五年三月「ドイツは世界の支配者たりえなかった。ドイツ国民は栄光に値しない以上、滅び去る他ない」と述べ、全土を焦土化する「ネロ指令」を出したが軍需相アルベルト・シュペーアによって回避された。同年四月三十日愛人エヴァ・ブラウンと結婚し、翌日、総統官邸地下壕で妻エヴァと共に自殺した。

ズデーデン チェコの北部の総称で、第二次大戦前、ここに多数のドイツ人が居住していた。ナチス・ドイツが近隣諸国に侵攻する口実として、列強によるズデーデン進出容認が利用された。

疾風怒濤 シュトルム・ウント・ドラング。ローマン主義に対してシラー（一七五九～一八〇五）、ゲーテ（一七四九～一八三三）などが提唱した民族主義的思想で、ナチス・ドイツの思想的標語となった。

平沼騏一郎 ひらぬま・きいちろう／1867～1952。岡山県に生まれ一八八八年帝国大学(のち東京帝国大学)を出て司法省に入った。一九〇七年大逆事件の捜査を指導し二三年検事総長、一四年シーメンス事件の捜査を指揮して二三年山本権兵衛内閣で法相。西園寺公望とは犬猿の仲で、何度も首相候補とされながら組閣することがなかった。西園寺の影響力が薄れた三九年首相となったが日独防共協定と矛盾する独ソ不可侵条約にあつて「複雑怪奇」の言葉を残して辞任した。ポツダム宣言受諾に最後まで反対し、戦後A級戦犯として巣鴨拘留所に拘留、四八年終身刑の判決を受けたが五二年仮出所、ややあつて病死した。

ムーア・スクール Moore School of Electrical Engineering : アルフレッド・フィトラー・ムーア (Alfred Filtner Moore) の寄付で一九二三年六月に設立され、ペンシルベニア大学から電気工学部として認定された。ここで教員を務めていたジョン・モークリー (John William Mauchly / 1907～1980) とジョン・プレスパー・エッカート (John Adam Presper Eckert Jr. / 1919～1995) がENIAC, EDVACを開発した。のちペンシルベニア大学工学部に統合された。

第一次ノモンハン事件 外モンゴル軍総司令官チヨイバルサン元帥は三九年五月十五日ごろ、第六騎兵師団をハルハ河に進出させた。同時にソ連第五十七狙撃軍団も同地に結集し、日本帝国陸軍東支隊が撤収した後の東岸に陣地を構築した。これに対して帝国陸軍第二十三師団は歩兵第六十四連隊の山縣支隊に出勤を命令、飛行隊も増強して五月二十八日攻撃を開始した。東支隊は側面攻撃に向かったが、ソ連・モンゴル連合軍はハルハ河西岸台上から砲兵射撃で反撃した。結果として東支隊は戦車隊を伴うソ連軍歩

兵部隊に包囲され孤立し、出動兵力の半数が戦死、死傷六三%の大損害を受けた。山縣支隊は師団司令部の命令により五月三十一日に戦場を離脱し、ソ連・モンゴル軍もハルハ河西岸に後退したため、戦いは収束した。

戦車の優劣 日本陸軍は戦車を「歩兵部隊を支援する補助的兵器」と捉え小回りが利く短砲・小口径と薄い装甲で装備した。対してソ連軍はヨーロッパ大陸での機械化戦闘に備え、長砲・大口徑で厚い装甲を備えた重戦車を開発した。装甲に使った鋼板の製造技術も優劣がはっきりしていた。のちに満州の戦車隊整備兵だった福田定一(1923～1996、筆名:司馬遼太郎)は、「日本の戦車はヤスリでこすると削れるほど装甲が軟らかかった」と述懐している。

中島飛行機 海軍機関大尉だった中島知久平(なかじま・ちくへい/1884～1949)が一九一七年に創業した。試作機がなかなか飛ばないので「さつはだぶつくお米はあがる／何でもあがる／あがらないぞい中島飛行機」などと揶揄された。のち三井物産と提携して陸軍から飛行機の設計・製造を受注し、第二次大戦では陸軍の主力戦闘機「隼」を生み出した。現在の富士重工の前身。

九七式戦闘機 一九三五年末、日本陸軍が中国大陸での戦闘用に発注した。単座式で全幅十一・三メートル、全長七・五三メートル、総重量一七九〇キログラム、最大速度四六〇キロメートル／時、七・七ミリ機銃二基を装備し、草原や荒地での離着陸を考慮してスパッツ型固定脚を採用していた。一九四二年までに三千三百八十六機が生産された。

堀越二郎 ほりこし・じろう／1903～1982。群馬県に生

まれ東京帝国大学を出て三菱重工業名古屋航空機製作所に入った。ドイツのユンカース社に留学して航空機設計を学び、「九六式艦上戦闘機」「零式戦闘機」「雷電」「烈風」などの設計を担当した。第二次大戦後は在日アメリカ軍立川基地技術顧問を経て東京大学宇宙研究所講師、防衛大学校教授などを務めた。

零式艦上戦闘機 「零戦」「ゼロ戦」とも。制式採用された一九四〇年が皇紀(神武即位年の元年とする年紀)二千六百年に当たり、皇紀の下二桁を取るというルールから「零式」となった。九六式艦上戦闘機の後継機として投入され、日中戦争から太平洋戦争全期に量産された。一千馬力のエンジン「栄」を搭載し、二十ミリ機銃二門、無線電話・電信機を装備した。航続距離三千キロ、最高速度五百キロ/時、急降下耐久速度七百四十・八キロ/時を達成した。一九三九年四月一日陸軍各務腹飛行場(岐阜県)で初飛行してから一九四五年八月十五日まで、一万四百三十機が生産されたとされている。

田中啓次郎 たなか・けいじろう/1891~1981。新潟県に生まれ一九一六年早稲田大学を出て黒澤貞次郎商店に入った。一九二一年支配人となったが関東震災のあと独立して日本事務器商會を設立した。輸入事務機器の販売ばかりでなく独自開発の情報記録管理装置を開発した。第二次大戦後、株式会社に改組し六一年日本電気と共同で小型電子計算機の開発に着手し、のちの「オフコン」の基礎を作った。六八年勲四等瑞宝章。

054 軍需動員

第五十四

軍需動員

一

ヨーロッパでナチス・ドイツが台頭し、極東では日中戦争の泥沼化と、国境紛争をめぐるソ連との緊張が高まってくる中で、電子技術に大きな前進があった。ラジオの普及とテレビジョンの技術開発の副産物である。

それは二つあった。

一つは「Radio Detecting And Ranging」すなわちRADAR（レーダー）だった。

オートバイやトラックなどが近くを走るとき、ラジオ放送にガリガリと雑音が入った。ラジオの電波に波長の異なる電波が紛れ込み、干渉が起きる。同じように上空を航空機が通過すると、受信電波が乱れる。

その現象に、軍部が注目した。

それまでも、電波が物体にはね返ってくることは知られていた。だが、その反射電波をうまくとらえることができないでいた。

一九二五年（大正十四）、東北帝国大学の工学部長だった八木秀次が、独自の超短波送受信理論に基づく指向性アンテナを開発した。彼は翌二六年に特許を取得したのだが、この発明は日本ではまったく評価されなかった。

八木は三年後の二八年（昭和三）、今度は弟子の岡部金次郎と共同で超短波発振器「マグネトロン」を初めて実用化し、アメリカで発表して国際的に高く評価された。指向性アンテナとマグネトロンを組み合わせれば、物体にぶつかって返ってくる微細な電波を増幅することができる。

欧州で第二次世界大戦が勃発した一九三九年（昭和十四）、アメリカ合衆国はイギリスを支援する目的でレーダーの開発に本腰を入れ、ナチス・ドイツ空軍機によるロンドン爆撃対策に実用化した。ただし初期のそれは、漠然と「何か近づいてくる」ということが分かる程度だった。

空中に浮かばせた防衛用の気球と似たり寄ったりの効果だった。もちろん何か、とはナチス・ドイツ軍機であるほかになかったのだが、迎撃のために舞い上がったイギリス軍戦闘機の性能がドイツ軍機に及ばなかった。

日本の軍部もわずかにその情報を得て、テレビジョンシステムの開発で実績があった東京芝浦電気と日本電気にレーダーの開発を指令した。日本電気は独自に製作した三極真空管を使って四〇年に試作に成功し、東京芝浦電気が

四二年に実用化第一号を開発した。

実をいうと、それより前の一九三五年（昭和十）ごろ、海軍研究所の技師がレーダーの研究開発を軍の上層部に進言したことがあった。だが、上層部は相手にしなかった。

「闇夜に提灯を点すようなものではないか」

「なにごとくも機械に頼ろうとする考えがなつとらん。正確な砲撃は訓練と精神である」

と門前払いにした。

「そんなものより、もつと破壊力のある新兵器の開発と将兵の訓練が大事」

と判断したのだった。

もつと破壊力がある新兵器、とは井深大が取り組んでいた「熱光線兵器」のことである。それについては後述する。ともあれ地道な科学技術の積み重ねというものを、日本の軍部は理解していなかった。

これからやや後のこと、一九四二年一月にフィリピン、二月にシンガポールを占領した山下奉文麾下の陸軍第二十五方面軍は、イギリス軍撤退後の陣地から地上用対空電波警戒機を鹵獲した。

それには「Y A G I A R R A Y」という文字が書かれていた。直訳すると「Y A G I の配列」だが、電波を受診する棒状の反射器（リフレクタ）、輻射器（ラジエータ）、

導波器（ディレクタ）を並べる構造のことをいう。

陸軍研究所、日本電気、東芝などの技師が調査したところ、押収した文書などから八木アンテナであることが判明した。

すると今度は、

「電波探知機を開発せねばならぬ」

ということになった。

これを聞いて、八木の師である長岡半太郎は

「周章狼狽、敵に学んで八木アンテナを装備するに至つたは、笑止と言わん」

と憤慨した。

二

もう一つの副産物は電子レンジである。

一九三六年に開催されたベルリン・オリンピックのとき、ナチス・ドイツは強力な電波発信装置を開発した。その装置はテレビ中継のためのものだったが、不思議なことにアンテナの周辺に大量の昆虫の死骸が落ちていた。

マイクロ波に殺虫効果があるということから、ナチス・ドイツはこれを殺菌装置に応用することを考えた。実用レベルの装置が開発されたのは一九三九年のことである。

殺菌装置と聞くといかにも平和的な利用のように思えるが、その目的はおぞましいものだった。ナチス・ドイツはこの装置を使って、アウシュビッツ収容所で殺戮したユダヤ人の遺体や、ガス室に送り込む前に奪った衣類を効率的かつ安全に消毒した。

連合国軍の爆撃によって装置の生産が遅れ、医療機関や収容所に設置されたのは四四年六月だったとされる。

一方、連合国側が考えたのは、

——昆虫を殺せるのなら、人間も殺せるはずだ。

ということだった。

マイクロ波で敵の兵士を殺傷することができれば、建物や橋などの施設、航空機や戦車などを無傷で手に入れることができる。電波兵器または熱光線兵器の開発が秘密裡に進められた。

この原理には、のちにソニーを設立した井深大も、第二次大戦前に気がついていて、彼は陸軍の命令で「熱光線兵器」の名で開発に取り組んでいた。これが現実のものとなっていたら、第二次大戦は怖ろしい——火炎放射器や原子爆弾だけで十分過ぎることだが——神をも恐れぬ悪夢の戦いになっていた。

偶然というのは、思わぬかたちで突然姿を現わす。

アメリカで軍事用レーダーの開発に当たっていた研究員

がマイクロ波を実験していたときのことだった。ある技師が、ポケットに入れていたチヨコレートがいつのまにか溶けていることに気がついた。研究中にチヨコレートをほおばっていたというのが、いかにもアメリカ人らしい。はじめは何が原因か分からなかった。

次に、やはりレーダーの実験中、ポケットに入っていたキャンデーが熱くなっていることが分かった。不思議なことに、理解できない現象にぶつかること、原因を解明したくな

るのが研究者、技術者というものであるらしい。ポケットに入れていたチヨコレートやキャンデーは、室温や人の体温でそう簡単に溶けるものではない。何か別の原因があるはずだった。彼らはレーダーの開発をそっちのけにして、チヨコレートやキャンデーの研究を始めた。他の研究室では同じ現象が起こっていないのだから、レーダーの電波に原因があるらしいことが推測された。

詳細に調べたところ、マイクロ波がチヨコレートやキャンデーの分子を超高速に振動させたことが分かった。超高速で振動する分子と分子が摩擦熱を起し、物体を加熱させたのである。熱線兵器、熱光線兵器は実現しなかったが、幸いにもそれが家庭用電子レンジに使われることになった。

こうした新しい機器や装置、ないし、まだ具体的な姿を見せていない技術というものは、当時においては第一義に

軍事用だった。とはいえ民需用に開発することが禁じられていたわけではなかった。

ところが日中戦争の本格化によって、「軍需」という言葉が誕生した。民需は後回し、というより

——ケシカラン。

ということになった。

三

満州軍閥の領袖・張作霖が奉天近郊で爆殺される一と月半ほど前、一九二八年（昭和三）の四月十七日のこと、二十二条で成る「軍需工業動員法」が成立した。その法律によれば、「軍需品」は次のようなものを指すと定義されていた。

- 一 兵器、艦艇、航空機、弾薬並軍用器具機械及物品。
- 二 軍用ニ供シ得ヘキ船舶、海陸聯絡輸送設備、鉄道軌道及其ノ附属設備其ノ他ノ輸送用物件。
- 三 軍用ニ供シ得ヘキ燃料、被服及糧秣。
- 四 軍用ニ供シ得ヘキ衛生材料及獣医材料。
- 五 軍用ニ供シ得ヘキ通信用物件。
- 六 前各号ニ掲クルモノノ生産又ハ修理ニ要スル材料、

原料、器具機械、設備及建築材料。

七 前各号ニ掲クルモノヲ除クノ外勅令ヲ以テ指定スル

軍用ニ供シ得ヘキ物件。

最後の一条「勅令ヲ以テ」を適用すれば、この国土に存在するおおよそすべてのもの——日本国民の生命・財産まで含んで——が軍需品になるという内容である。

そこまでの法律を備えていながら、政府は新たに「国家総動員法」を発令・公布して、強制力と統制力、つまり有無を言わせず国民のすべてを軍事体制に協力させる力を担保した。その新しい法律が及ぶ範囲は、物品や生産設備、国民の生命・財産にとどまらなかった。

——生命・財産のほかに何があるのか。

と読者は訊ねるかもしれない。

それは精神ないし「心」というものである。思想・信条、宗教、学問、創作、あるいは欲求、希望、慈悲、喜怒哀楽、こうしたものまで国家に供出せよという。それこそがファシズムの目的とするところであって、そこに人道的な行動を許す余地は残されていなかった。

軍需動員が及んだのは民間企業だけではなかった。

大学の研究所も、軍需一色だった。

「研究所での研究テーマは軍事関連のみでした」

と、当時、東京帝国大学の航空研究所に研究員として勤務していた庄野久男は語っている。

庄野久男は一九一九年（大正八）、徳島県勝浦郡に生まれ、一九三七年（昭和十二）に東京・目黒にあつた無線電信講習所に進学した。

半官半民の運営になる専門学校で、無線通信士の養成機関だった。一級の資格を取ると商船学校卒と同格となり、外国航路の船舶に乗ることも夢ではなかった。

一九三九年に卒業すると、庄野はその優秀さが認められて東京帝国大学の航空研究所に研究要員として配属された。ところが、配属から二週間後に陸軍から召集令状が届いた。香川県善通寺に駐屯していた第四連隊の山砲隊への入隊が決まり、ここで訓練を受けた。同年十月、第四十師団に転属となり、中国に向けて坂出港から出征した。

一九四〇年六月二十一日、中国遊撃軍掃討のために歩兵四十人、砲兵十六人を率いて出動したところ、二千人ほどのゲリラ兵に三方を包囲されてしまった。このとき彼は歩兵が携帯していた無線機を使って友軍と連絡を取ろうとした。

ところが無線がまったく通じない。

——もはやこれまでか。

と覚悟を決めた。

覚悟、というのは、部隊が一丸となって敵中突破の戦端を開くということである。むろん、全員が戦死するであろう。

——最後にもう一度だけ。

と試みた無線が、わずかに通じた。自分たちの居場所を伝えたところ、日本軍が確保している安全な道が示された。その情報をもとに、部隊は闇にまぎれて脱出することに成功した。

除隊となったのは四一年の春だった。東京に戻ると東大航空研究所は東工大、東北大、陸軍航空研究所の共同研究の場になっていた。庄野に与えられた課題は、射撃訓練用模型飛行機の無線操縦装置の開発だった。

九月に技官に昇格し、今度は電波で航空機の航空高度を計る装置の開発だった。高射砲の照準をより正確にするのがねらいだった。十二月七日に茨城県の水戸飛行学校でテストが行われた。テストでは高度五千五百メートルを実測し、試作装置の性能は「合格」だった。

テストが終わったのは八日の早朝だった。夕方に目が覚めると、玄関のガラス戸に新聞が挟み込まれていた。日本軍のハワイ奇襲成功を知らせる号外だった。

開戦後、庄野は高度計測技術を活用した電探の開発に携

わった。一七二メガヘルツ、三キロボルトの出力、一次パラボラアンテナを使用し、四二年二月六日、百三十三キロ離れた羽田上空の飛行機を捕らえることに成功した。もちろん、それまでも国産のレーダーは開発されていた。陸軍は日本電気製、海軍は東京芝浦電気製を制式採用していたが、航空研のレーダーは戦いのためではなかった。米空軍による本土爆撃に備えるためだった。

以上の話は府中アマチュア・ラジオ・クラブ（現在は府中アマチュア無線クラブ）のホームページ「J A I A A 庄野久男 M O プロファイル」ならびにホームページ「B E A C O N 関東のハムたち 庄野さんとその歴史」に出ている。

四

戦時体制への移行が最も大きな痛手をもたらしたのは、海外から事務機械を輸入していた黒澤商店、日本事務器商会、日本ワットソン統計会計機械などだった。彼らは一九三〇年代に起こった国産品愛用運動で最初のダメージを受けた。

ナショナル金銭登録機は、藤山愛一郎の日本金銭登録機に吸収統合され、日本事務器商会はファイリング装置の国

産化に移行せざるを得なかった。

日本ワットソンだけは、苦しいながらも事業を広げることができた。

計算機を国産化する動きは、矢頭亮一の事業がその死によつて途絶え、関東大震災で川口式分類統計機の技術が失われた。わずかにヘンミ計算尺とタイガー計算器が電動による自動化を指向していたが、統計会計機械装置の国産化は一朝一夕にできるものではなかった。

軍需で保険業界や軍関連の機関、軍需産業の製造業——造船、航空機、鉄鋼、機械、化学、窯業——などから大型受注があつたし、国産化したパンチカードの継続的な需要が堅調に推移していた。

しかし一九三八年（昭和十三）七月に、日本の中国侵略に対する経済制裁の一環として、アメリカ政府が「道義的対日禁輸」を発動した。このため、日本ワットソンは、受注した I B M 社の計算機を円滑に輸入できなくなっていた。当時、日本ワットソンがカスタマーに配布した但し書きがある。

納期ハ輸入許可附後六カ月、但シ輸入不許可ノ場合ハ上記御注文ハ御受致兼候

事実上の受注拒否に等しい。

並行して日本国内では、国家総動員法を境にパンチカード式統計会計機械装置の利用も軍需に傾いていく。

一九四〇年（昭和十五）に立川飛行機が「IBM405」の採用を決定した。

同社は石川島造船所から分離独立し、軍から「赤トンボ」の愛称で知られる複葉式練習機（制式名称は「海軍九三式中間練習機」）の受注を得て、三菱重工業、中島飛行機に次ぐ軍用飛行機メーカーとなっていた。

ここでは日本ワットソン統計会計機械の営業部長だった安藤馨が中心となってシステム設計を行い、資材管理、作業管理、原価計算、賃金計算といった業務を機械化した。

正規ルートでの輸入は、翌四一年の夏、名古屋の大同製銅（のち大同特殊鋼）に設置されたのが最後になった。同社も軍からの発注に大きく依存する軍需産業として、正確・迅速な原価計算や部材管理が必要とされていた。

国家総動員法が施行されてから以後は、日本ワットソンや三井物産、あるいはタイガー計算器販売や黒澤商店、日本事務器商会などは軍需産業に売り込まざるを得なかった。軍艦や戦車、大砲、銃器、軍用トラック、兵装などを生産する企業が、計数管理のニーズを強く持っていた。事実、日本ワットソンの水品浩は一九四〇年以後、航空機や製鉄、

造船といった分野の企業に営業力を集中している。

アメリカ政府は、それによって日本の軍事力が強まることを警戒した。道義的対日禁輸令で鉄、石油、精密加工機械などと並んで計算機が指定されたのは、アメリカ政府の立場からすれば当然のことだった。日本ワットソンは受注を受けても、納品期日を確約できない状態に追い込まれた。

大日本帝国海軍の航空隊が真珠湾奇襲攻撃に成功した直後、一九四一年の十二月二十三日に「敵産管理法」が公布、即日実施された。これに伴って日本ワットソンの社員たちは事実上、職を失った。

退社した幹部のうち、北川宗助、島村浩、安藤馨などは、のちに神戸に本拠を置いて統計会計機械装置の国産化を目指すことになる。

それに対して水品は、日本軍がフィリピンの米軍コレヒドール要塞から接収したIBM社の計算機を補修することとどまった。計算機をめぐる日米のねじれが、日本ワットソンの社員たちの戦後を決定していく。

補注

八木秀次 やぎ・ひでつぐ／1886～1976。大阪に生まれ一九〇九年東京帝国大学電気工学科を出て仙台高等工業教授、のち東北帝国大学工学部教授候補としてドイツに留学した。一九九年東北帝大教授、三二年大阪帝国大学の設立に参画し翌年理学部長、四二年東京工業大学学長、四四年技術院総裁。第二次大戦後、公職追放となったが五三年社会党から立候補して参院議員となり、一方では「八木アンテナ」を創業して社長。五六年文化勲章。

岡部金次郎 おかべ・きんじろう／1896～1984。

名古屋市出身で東北帝国大学を卒業した。一九二八年、東北帝大助教の時「分割陽極マグネトロン法」を考案し、極超短波を発生することに成功した。四四年に文化勲章を受け、第二次大戦後、大阪大学教授を務めた。

マグネトロン magnetron：最初に発明したのは一九二二年、アメリカ合衆国のアルバート・ハル（Albert Wallace Hull／18880～1966）とされている。これを現在のような形に発展させたのは大阪大学教授の岡部金次郎である。

長岡半太郎 ながおか・はんたろう／1865～1950。長崎県に生まれ一八八七年帝国大学（のち東京帝国大学）物理学科を出た。九三年ドイツに留学し九六年帰国して数理物理、実験物理、地球物理などの基礎を築いた。二四年「水銀を金に変える方法を発見した」と発表したが、直後に間違いを認めた逸話もある。三七年第一回文化勲章。

庄野久男 しょうの・ひさお／1918～2018。一九三八年

アマチュア無線の免許を取得した。第二次大戦後、一九五二年にアマチュア無線が再び許可された際に、関東エリアの再開後第一号を意味する「JA1AA」のコールサインが電波監理委員会（当時）から交付された。日本アマチュア無線連盟（JARL）の副会長を二期務めた。エピソードはホームページ「JA1AA庄野久男MOプロフィール」（府中アマチュア・ラジオ・クラブ）、ホームページ「BEACON関東のハムたち・庄野久男さんとその歴史」から。

山砲 一九〇八年に制式化され、主に歩兵連隊の支援砲として運用された。分解して六頭の馬に分載または組み立てた状態で一頭の馬で牽引し八人で操作した。太平洋戦争全期間を通じ多くの戦場で直接・間接支援砲撃に使用された。

藤山愛一郎 ふじやま・あいちろう／1897～1985。東京都に生まれ、慶應義塾大学を出た。父・藤山雷太（1863～1938）の後を受けて大日本精糖、日東化学工業、日本製紙の社長などを務め、一九四一年に東京商工会議所会頭に就任した。第二次大戦では海軍省顧問、大政翼賛会総務を務め、四四年後半以後は戦争終結に向けた工作を図った。

第二次大戦後、公職追放となった。解除後は日本航空会長、日本テレビ取締役などに就任する一方、政治家となり、五七年発足の岸内閣で外相、自由民主党総務会長などを歴任した。彼が政治家に転身したとき「絹のハンカチを雑巾にするようなものだ」といわれた。

複葉機「赤トンボ」 複葉式で計五千五百八十九機が生産され、一九三八年から機体を赤みの帯びたオレンジ色に塗るようになった。終戦間近には特攻作戦にも加えられた。

055 敵産なれど

第五十五

敵産なれど

一

計算機の軍需利用を物語るのは、その年の春、陸軍から日本ワットソン統計会計機械に大量の発注があつたことである。日本IBMの資料では「数十セット」となつてゐるが、日本ワットソン統計会計機械に勤めていた北川宗助の証言によると

「八十セットだった」

という。当時の国内で稼働していたパンチカード式統計会計機械装置の総台数に匹敵する。

この発注は折からのアメリカ政府による輸出規制で実現しなかつた。仮に実現していれば以後の戦争の展開は少し違つていたかもしれない。

陸軍が八十セットもの「IBM405」を発注したのは、山下奉文の独断だつたといわれている。

彼は意外にも欧州の事情に詳しくかつた。

若いころ、彼は皇道派——二・二六事件を起こした青年

将校たちの一派——に属していた。そのために、軍部中枢から疎んじられた。

——そういう危険なやつを日本の国内においておくわけにはいかん。

ということ、ドイツやオーストリアなどの日本大使館に武官として派遣された。

体裁はいいが、実態は左遷である。

米英との戦争不可避の気運が高まつた一九四〇年、山下は航空総監に就任し、ドイツ視察団の団長としてメッサーシュミット社を見学した。この会社は流線型の高速戦闘機「Bf109E」あるいは、世界で初めて実用レベルのジェット機「Me262」を開発したことで知られる。ここが電動パンチ装置とIBM405統計会計機械装置を活用して、航空機の生産能率を高めていた。

このころ、軍用航空機には高出力のエンジンの搭載が強く求められていた。出力が大きくなるとより多くの燃料を消費することになるのだが、短時間で高高度に上昇すれば同じ量の燃料で飛行時間もしくは航続距離を伸ばすことができる。

具体的には、高度六千メートルが一つの目安とされた。

高度が六千メートルに達すると、空気抵抗が急激に低減し、省燃料化が可能になる。また急上昇速度を上げれば敵

機より早く、より高い位置に達することができ、高出力エンジンの搭載で機体の重量が増すのだが、降下速度が速くなる。

当初は艦船の真上から真つ直ぐ爆弾を落とす作戦が想定され、「重戦闘機」という言葉が生まれた。その流れの中から、「一撃離脱」という戦法が編み出された。上段から全体を俯瞰し、狙い定めた敵機に急降下しつつ銃撃するのである。

結果として機体は鋳金属製となり、引込脚、開閉式キャノピーが主流になった。航空母艦に艦載するため折りたたみ翼が採用され、航続距離を伸ばすための増槽や高高度の酸素濃度に対応する酸素マスクが必要になった。設計は精緻になり、使用する部材の点数が増えた。

日本軍は部材や部品、器具などの管理を人手で行ったが、ドイツ人は合理的に考へた。

——機械的に管理すれば、流れ作業で機体を組み立てることができないではないか。

この新しい方式に山下は強く刺激された。

ドイツ視察を通じて山下は、

——これからの戦争は航空機の性能と数が勝敗を決める。攻撃するにも守るにも技術と生産力がある。

ということを強く認識した。

また山下はリーダーと暗号の重要性にも気がついていた。ヒトラーは極東の島からやってきた同盟国の陸軍幹部を歓迎して、

——見たいものがあつたら言ってくれ。東洋の友人にドイツは隠すようなことはしない。

と告げた。

それによつて山下は電波を使つて航空機や艦船の位置を検出する装置、複雑な暗号を生成する専用の装置を見聞し、また敵の暗号を解読する技術を提供してくれるよう依頼した。情報戦が作戦の基盤となることを、山下は理解した。

そこで山下はドイツから帰国するとすぐ、首相・東条英機に強大な兵器より技術開発と生産力の強化を申し入れた。併せて独断でワットソンの計算機を発注したわけだった。

二

一般論として、日本の海軍は開明的だったが、陸軍は保守的だった、といわれる。

海軍は兵制をイギリスに学び、欧米の日本大使館に武官を派遣していた。その関係から先進的な機器や技術に敏感だった。それに対し陸軍はプロシア式兵制で歩兵部隊による白兵戦と精神論を重視し、戦車や野戦砲など機械化戦法

を軽視していた、という。

この通説はおおよそにおいて正しいが、一部については異論がある。というのは、まず海の戦いというのは戦場を自在に選択することができ、会敵すれば一撃して退く。

個々の艦船が独立した指揮命令系統を持つ組織で構成され、戦場における集散離合は各艦の指揮官によつて判断が下される。

また艦船は戦場にあつては装備・搭載した武器・弾薬のほか追加補給を受けることがない。最新鋭の機器や兵器、技術に敏感にならざるを得なかつた。

対して陸軍は、万を単位とする歩兵の集団的・組織的な戦闘を前提にものごとを考える。他の戦線から手薄な前線に部隊を回し、基本的には英雄的な突出を許さず敵に圧力をかけつつ長い時間をかけて陣地を確保する。それに広大な中国大陸で最も最初に航空機戦力を活用したのは陸軍ではなかつたか。

——勝敗を求める遊戯に喩えれば、海軍は将棋、陸軍は囲碁というわけである。

軍の戦い方、それは戦略思想と言い換えてもいいが、その違いを理解しなければならぬ、という。それは分かるが、世界の趨勢から見れば、日本の海軍も陸軍も似たり寄つたりだつた。

開明的とされる海軍は航空機を重視した。しかし超弩級戦艦「大和」「武蔵」に代表される大艦巨砲主義から脱することができなかつた。かつ、戦法は日清、日露戦争の艦隊決戦を継承していた。

なるほど艦船の建造を受注した三菱造船、航空機を受注した立川飛行機などは部材管理にパンチカード式統計会計機械装置を使い、軍艦の内部では弾丸を発射する角度や初速の割り出しに電気式計算器が使われた。だが、もつと根本的な課題である物資の調達と最適配備にかかわるシステムは最後まで構築されなかつた。

陸軍にいたつては、戦地で食糧を調達せよという、時代錯誤も甚だしい指令がまかり通つた。食糧ばかりでなく武器、弾薬すら敵から奪つて戦えというのは、チンギスハン以来の無謀な命令だつた。

日本軍が計算機の重要性に気がつくのは、抜き打ち的に真珠湾を攻撃して広大な太平洋と東南アジアに兵力が拡散したときである。物資を運ぶ船舶の手配が混乱した。この戦場に何をいかほど送ればいいのか、送つた物資が間違ひなく現地に荷揚げされたか、誰にも分からなかつた。

分厚い毛布がサイゴンの司令部に届いたり、万余の陸戦兵の手許に飛行機の部品が手渡されたりした。さらに大量の武器弾薬が港湾の倉庫に滞留した。近代戦争を仕掛けた

のに、事務処理は前近代的な仕組み——十露盤と人海戦術——で行われた。

実際、主要な物資積出港には、近隣の学校から十露盤自慢の女学生が五十人から百人の規模で集められ、毎日、パチパチと珠をはじく勤労奉仕部隊が編成されていた。

「会計機械があるではないか」

内閣の企画院は言った。

ところがどう逆立ちしても、軍や関係機関が保有している計算機は絶対数が少なかった。

大本営のうろたえぶりを見たら、山下奉文は

「だからオレは、八十台を注文したのだ」

と、ふんぞり返って自慢したのである。

いたし方なく陸軍参謀本部は、日本生命が保有するパンチカード・システムの軍需への転用を強く要請——つまり命令——して、暗号の解読などを行った。日本生命には海軍省からも「強い要請」があつて、艦船配置計画の策定などを行っている。そうした要請は第一生命、帝国生命、安田生命、松坂屋などにも行われていた。

海軍からも強制使用の指達があり、随時仕事を持ち込まれ、海軍士官二名の厳重な監督のもと、統計課員がすべてその作業に当たらなければならなかった。

こう記すのは帝国生命である。

日本ワットソンの資産を継承した日本統計機は、軍需産業からの要請にも応じなければならなかった。しかし新規の輸入は不可能だったため、生命保険業などを中心とする「平和産業」で使用しているマシンを斡旋した。

このとき東京芝浦電気から派遣された社員の中に、稲垣早苗がいた。戦後、日本IBMの第四代社長となる人物である。

三

一九四一年十二月八日、日米開戦直後（十二月二十三日）に「敵産管理法」が公布、即日施行されると、日本ワットソン統計会計機械の全資産が凍結された。そればかりでなく、経営の実質を担っていた水品浩、安藤馨の両名がスパイ容疑で横浜警察署に逮捕・拘束されてしまった。同社の事業活動は事実上、このときに停止した。

大蔵省は翌四二年一月、拘留中の水品に

「資産の管理人は誰が適任か」

と意見を求めている。

これに対して水品は、森村商事の取締役であつて、元モ

リムラ・ブラザーズ・カンパニーでニューヨーク副支配人としてパンチカード式計算機の輸入業務にかかわった中山武夫を推した。しかし中山は高齢を理由に辞退し、後任の地主延之助が管理人に指名された。

地主は一年をかけて日本ワットソン所有の自動車や不動産などを処分したのち、一九四一年十二月末現在における貸借対照表を作成した。それによると同社の総資産は二百四十八万七千七百八十七円四十六銭となっている。

日本ワットソンを「敵性企業」として解散させたにもかかわらず、戦線が太平洋全域に拡大したことから、日本軍中枢はこれまで以上に統計会計機械装置の重要性を認識した。また既存のユーザーは、継続的な保守サービスを強く求めていた。

こうしたことから地主は渋澤敬三や大口ユーザーである第一生命などと相談し、保守サービスの専門会社を設立することで合意を見た。中心となるのは精密電気機械に通じている会社がいいということで、東京芝浦電気が選ばれた。一九四三年六月一日、「日本統計機械株式会社」が発足した。

「資本金は二百万円で、五五%を東京芝浦電気が出資し、同社副社長の清水与七郎が社長に就任した。このほか、西岡俊雄、矢野一郎、弘世現、渋澤智雄、森村義行が役員に

名を連ねた。矢野は第一生命、弘世は日本生命、渋沢は渋沢倉庫、森村は森村商事、つまりCTR社時代から深い因縁を持つ民間のIBMユーザーを代表した人選である。

日本ワットソン統計会計機械から日本統計機に移籍して営業部長を務めることになった矢向音久の述懐によると、発足に際して矢野一郎は、

「われわれ企業家としてはIBMの事業を残しておくことが業務と思う」と述べたという。

彼は純粹にユーザーの立場から、IBM統計会計機械装置の温存を願ったと考えていい。ただ、実質的な経営の主体となった東京芝浦電気は、新しいビジネスチャンスとしてとらえていた。

すなわちIBM社のパンチカード・システムを保守することによって、機械製造の技術を取得し、あわよくば模倣しようとしたのである。鐘淵紡績、神戸製鋼所と同様、大本営の要請があったのであろう。にしても、同社において計算機への関心は、すでに戦前に始まっていた。

日本ワットソンの社員たちはどうしたであろうか。

水品浩は日本ワットソンが「敵産管理法」で資産を凍結されると同時に、横浜の山手警察署に逮捕された。書類上

の代表取締役社長はモリス・シユバリエだったが、一九四〇年にアメリカに帰国したまま日本に戻ってこなかった。

どうやらシユバリエと水品の間で打ち合わせができていたらしく、結果として水品が実質的に経営全般を見た。治安当局（実態は特別高等警察）は以前から水品に目をつけていて、十二月八日、対米開戦と同時に逮捕・拘留に踏み切った。

営業責任者だった安藤馨も同時に逮捕された。ただし安藤は、叔父が司法大臣の岩村通世であったことから即日釈放となった。しかし水品は翌四二年三月まで拘留され、特別高等警察の厳しい取調べを受けた。

容疑はスパイ容疑だった。営業で軍関係機関に出入りしていたことが疑われたのである。

一九四二年の三月、「該当する事実なし」として水品は釈放されたが、今度は海軍の命令で三重県鳥羽にある神戸製鋼所鳥羽工場でIBM統計機の修理と部品の設計に従事させられた。

陸軍がアメリカ軍フィリピンのコレヒドール要塞から接収したIBM統計機を、再利用できるよう、水品に修理を委託したのである。船の甲板に積んで輸送された機械装置は、汐をかぶって全体が真っ赤になっていた。水品はまず
▽RUBY CHAR=鍍^{ニッケル}、^{錆び}、落^しから始め、破損した部

品を日本統計機に作らせるなどして稼動可能な状態に復したという。

北川宗助と安藤馨は、四二年三月に日本ワットソンを退職し、後輩の大倉正士を誘って神戸市の六甲山麓に「統計研究所」を設立した。神戸は北川が大阪営業所長だった時、IBM統計機を納入した神戸商業大学があつて、北川や安藤は同大学教授・平井泰太郎が創設した「経営計録講習所」の講師として招かれたのだった。

経営計録講習所は神戸商業大学が「IBM405」を導入したのち、民間企業の人材を育成すべく開設した講座と、平井研究室を兼ねた組織だった。終戦後、ここで学んだ人のなかから多くのシステム・エンジニアが出た。

——暗号解析や軍需物資の輸送に、統計会計機が必要。と判断した政府は、神戸の「統計研究所」に統計会計機の国産化を指令した。そのために軍の予算二百円が拠出された。これを受けて鐘淵紡績は兵庫工場に精密機械工場を建設し、北川らが開発に当たった。

その北川にも、召集令状が送られてきた。会社に相談すると、鐘淵実業の社長・津田信吾はただちに陸軍に連絡し、徴兵免除の措置を得ることができた。統計会計機の開発が優先されたわけだった。

鐘淵紡績で作られたパンチカード式計算機械装置の試作

機は鐘淵実業や陸軍の工廠や暗号解読部門のほか九州帝国大学などに納入された。しかし一九四五年の春、米B-29の空襲で設計図なども完全に焼失した。

四

安藤馨の配下にいた今村栄喜は、戦時中も一貫して立川飛行機に設置された統計会計機をサポートしていた。徴兵されずに済んだのは、パンチャー、サービスエンジニアとしての仕事が「お国へのご奉仕」と理解されたためだった。終戦後、北川に誘われて連合国軍総司令部の情報処理業務に従事することになる。

島村浩は明治学院大学英文科を卒業して、日本ワットソン統計会計機械の設立と同時に入社した。ところが一九三八年に召集され、二年間の初年兵教育を受けたのち、一九四一年九月から四三年一月まで、戦車旅団の中隊長として台湾―マレー半島―シンガポールを転戦した。

関東軍に配属されていたら彼の戦後はなかったに違いない。

四三年に兵役を解かれ、向かったのは神戸だった。鐘淵紡績の兵庫工場で統計機の国産化に取り組んでいた北川宗助、安藤馨と合流し、並行して神戸商科大学で講師を務め

た。

前川良博は一九四二年に陸軍に召集され、平壤の高射砲隊に編入されたあと、釜山を経てラバウル、ブーゲンビルを転戦した。

ブーゲンビル島はガダルカナル島と並ぶ戦略の要地だったが、最後は撃ち返す砲弾もないままアメリカオーストラリア連合軍に一方的に攻めたてられ、アメーバ赤痢とマラリアに侵されながら一時は玉砕も覚悟したという。

四六年、無事帰国。

モリス・シユバリエは一九四〇年に日本を離れ、IBM社を退社してイギリスに渡り、次いでヨーロッパに渡って母国ベルギーをナチス軍から解放すべく、ベルギー自由軍に身を投じた。対ナチ・ゲリラ戦線で指導的役割を果し、戦後になって再び来日したときの肩書きは「連合国軍ベルギー代表」だった。親日家として戦後日本の復興に尽力した。

日本ワットソンでカスタマー・サービス部門を統括したチャールズ・デッカーは四一年にアメリカに戻り、アメリカ陸軍のMRU（マシン・レコード・ユニット）に配属された。パンチカード・システムの操作と保守を任せられ、終戦の時はフィリピンのマニラにいた。のち戦略爆撃調査団を経て日本IBM初代社長となった。

日本ワットソン統計会計機械のフィールドサービス業務を継承した稲垣早苗は、軍服に似せたカーキ色の国民服を着て、東奔西走してIBM統計会計機械装置の保守に当たっていた。

皆機械の保全には苦勞したわけです。僕らは長崎に行ったり名古屋へ行ったり、重工業めぐりをして歩いた。部品が摩滅すると、部品そのものをもって行つて、東芝の技術屋さんが似て非なるものを作つて供給してくれた。

稲垣らの奔走で戦争中も計算機はそこそこに動いていた。

~~~~~ 補注 ~~~~~

山下奉文 やました・ともゆき／1885～1946。太平洋戦争で第二十五方面軍司令官としてマレー上陸作戦を指揮して成功させ、連合軍から「マレーの虎」の異名で畏れられた。四三年、大将に昇進し、四四年から第十四方面軍司令官としてフィリピンに駐屯した。四五年春、連合軍に投降し、翌四六年二月二十三日、「マニラ大虐殺」の罪で絞首刑に処せられた。

メッサーシュミット社 もとはバイエルン航空機製造という小さな航空機メーカーだったが、開発・設計技師だったヴェイリ・メッサーシュミットが経営権を取得し、先行するユンカーズ社やフォッケウルフ社などにはない軽量・全金属機体による航続性能、折りたたみ脚採用による高速飛行、大口径機銃装備による攻撃力などでナチス・ドイツ軍の主力戦闘機を受注した。世界初のジェット機を開発したことで知られる。第二次大戦後は五〇ccエンジンを搭載した三輪車やオートバイなどを生産した。

戦闘機「Bf109」 スペイン内戦のコンドル部隊に三機が試験的に投入された。第二次世界大戦終了までドイツ空軍の主力戦闘機として三万五千機が生産された。イギリス空軍のスピットファイア（スーパーマリン社製）、ハリケーン（ホーカー・エアクラフト社製）、アメリカ空軍のF4Fワイルドキャット、F6Fヘルキャット（グラマン社製）とライバル関係にあった。

戦闘機「Me262」 世界初の実戦配備および実戦を行ったジェット機。戦闘機の愛称は「シユヴァルペ」（ツバメ）、戦闘爆撃機は「シユトゥルムフォーゲル」（ミズナキドリ）だった。高高度

の水平飛行で最高時速八百七十キロ、急降下速度九百五十キロの記録がある。一千四百三十機が生産された。

暗号装置 ナチス・ドイツが開発した暗号「フィッシュ」と暗号装置「エニグマ」は連合国軍を大いに悩ませた。この暗号を解読する目的で行われた技術開発が電子計算機の基礎を作ったとされる。

超弩級戦艦 「弩」は石弓の意。超弩級は「特別に大きい」という意味で使われ、「ドアホ」「ド根性」など強調の接頭詞にもなっている。しかし本来は一九一六年就役のイギリス海軍の大型戦艦「ドレイトン」（二万七千五百トン、二十インチ砲十二門装備、速度毎時二十一ノット）を指す。各国が「ドレイトン号を超える大型戦艦」を目指したが日本は建造計画を修正できず「準下級」戦艦しか建造できなかった。「ドレイトン」に「弩」の文字を当てたために本来の意味が分からなくなった。

日本帝国海軍における計算機の利用 戦艦「大和」「武蔵」、航空母艦「大鵬」などの設計と建造には大量の鉄鋼材が必要だった。そこで統計会計機械装置を使わざるを得なかった。また艦船の砲台にはヘンミ計算尺を改良した専用の電動計算機が常備され、航行しながら波高や風向、風速などを勘案した砲弾の打ち出し角度の計算が行われた。

モリムラ・ブラザーズ・カンパニー 森村豊などが設立した「日の出商会」が発展して社名を変更した。一九四一年十二月八日、日米開戦と同時にアメリカ連邦政府により資産を凍結され事実上解散した。

西岡俊雄 にしおか・としお…東京芝浦電気の資材部長だった。矢野一郎 やの・いちろう／1899～1995。第一生命を創

業した矢野恒太（やの・つねた／1866～1951）の息子。

一九四七年第一生命社長となった。

**弘世 現** ひろせ・げん／1904～1996。実父は三井合名会社理事の成瀬隆蔵（なるせ・りゅうぞう／1856～1942）。

日本生命第三代社長・弘世助太郎の娘婿となった。一九四四年、三井物産から日本生命に移って取締役、四七年専務、四八年社長となった。以後、三十五年間にわたって日本生命の社長を務めた。

**洪澤智雄** しづさわ・ともお／1901～1947。渋沢栄一嫡流の孫で日本ワットソン統計会計機械の取締役だった。本業は澁澤倉庫常務だった。

**森村義行** もりむら・よしゆき／1896～1970。松方正義（第六代内閣総理大臣）の十一男として生まれ、一九二一年京都帝国大学を出た。同年、森村開作（七代目市左衛門）の娘・松と結婚して森村姓となった。

**岩村通世** いわむら・みちよ／1883～1965。東京に生まれ一九一〇年東京帝国大学法学部を出て司法省に入った。三四年東京地裁検事正となり帝人事件、天皇機関説事件の捜査を指揮した。刑事局長、司法省次官、検事総長を経て四一年第三次近衛内閣、東条内閣で法相を。第二次大戦後A級戦犯、四八年釈放され日本調停協会連合会理事となった。

**津田信吾** つだ・しんご／1881～1948。愛知県に生まれ慶應義塾大学を出て鐘淵紡績に入社した。一九一〇年西大寺工場長、一六年淀川工場長を経て二九年取締役、三〇年副社長、社長。

三八年鐘淵実業を興して重工業や航空機製造、機械製造など軍需産業に進出した。第二次大戦後、戦犯として拘留されたが脳溢血で倒れた。

**チャールス・デッカー** Charles M. Decker：第二次大戦前、日本ワットソン統計会計機械にエンジニアとして派遣され、サービス部門の責任者を務めた。日本人女性と結婚し日本語も達者だったが太平洋戦争とともにアメリカに帰国、のちアメリカ陸軍太平洋戦線の情報処理部門に勤務した。連合国軍総司令部（GHQ）戦略爆撃調査団の一員として東京に駐在し、五一年「日本インターナショナル・ビジネス・マシンス」設立と同時に社長となった。

**稲垣早苗** いながき・さなえ／1910～1999。一九四三年十月、日本統計機に入った。東京芝浦電気から移籍したとする説と、知人の紹介で日本統計機に入社したとする説がある。一九五〇年、営業活動を再開した日本IBMに入って営業課長、五六年取締役、六〇年常務、副社長を経て六二年社長となった。

## 056 東亞新秩序

第五十六

東亜新秩序

一

一九四一年の六月二十二日、ナチス・ドイツがソ連と交戦状態に入ったという報せが入った。それをきっかけに、国内では

「新体制」

「東亜新秩序」

「バスに乗り遅れるな」

という言葉が流行した。

最初にこの言葉を使ったのは、近衛文麿であつたらしい。近衛の家は、かつては摂政・関白を独占した藤原家の筆頭であり、ということは天皇に最も近い家柄であつて、父篤麿は公爵にして貴族院議長、文麿自身は学習院から一高、東京帝国大学に進み、京都帝国大学法科に転じたというから、優秀な頭脳の持ち主だつた。

京都帝大時代にマルクス主義者の河上肇に従つて勉強したかと思つと、天皇を中心に陸軍の改革を訴える皇道派の

青年将校とも交流を持ったのは、公家ならではの離れ業であつたのかもしれない。政治好きという点で幕末維新の岩倉具視に似ていないでもないが、得体の知れない鴎のような思考の持ち主であつた点は岩倉をはるかに凌駕する。

政治的言動が注目を集めるようになったのは、第一次大戦の戦後処理を協議した一九一九年のパリ講和会議のときである。内務省職員として西園寺公望に随行した近衛は

「英米本位の平和主義を排す」

と題した論文を発表して耳目を集めた。

その主張は父篤麿の大アジア主義を継承しつつ、米欧列強による世界支配を拒否すべきであるとしたところに特徴があつた。

——日本は正当な生存権を行使するのである。

ここで彼が「日本は」を「アジアは」に言い換えていたら、その後には別の展開があつた。だが近衛はそれ以上でもなければそれ以下でもなかつた。

柳条湖事件が起こつた一九三二年九月、近衛は

——軍部の行動は「運命の道」である。

と論じて軍部の喝采を浴びた。

そして彼は続けて、

——そのために政治家は革新を実行しなければならぬ。と論じたが、方向性を示すことがなかつた。時の流れに

乗る標語作りはうまかったと見える。

最初に首相に就任したのは一九三七年六月、林銑十郎のあとを受けたものだった。

組閣直後に盧溝橋事件、上海事変が勃発して日中両軍が戦争状態に突入していた。その引き金は関東軍が引いたにせよ、国家総動員法、戦時統制経済への移行や大本営の設置、「中国国民政府を相手にせず」の声明を発表するなど、客観的に見れば日本を戦争の泥沼に導いたのは近衛にほかならない。

だが、当の本人はそうとは思っていなかった。

三九年一月四日に首相から枢密院議長に転じたが、天皇に直接面会できる公家最高位の立場を巧みに利用して、平沼騏一郎、阿部信行、米内光政と三代続いた短命内閣にあつて「閔白政治」を取り仕切った。

——「シュトルム・ウント・ドラング」を合言葉に、ナチス・ドイツ軍が対ソ電撃作戦に成功した

という情報を得た彼は直ちに枢密院議長を辞任し、「新体制」運動を提唱した。迅速に「新体制」に移行するために、「新しい国民組織」が必要である、と説いた。

——旧来の政党はなべて解党し、「近衛党」に結集すべしである。

これが「大政翼賛会」として実現し、すべての国民は

「隣組」に組織されていく。

近衛が唱えた「新体制」が支持を得ることができたのは、一九四〇年の世相にもよっている。

この年は皇紀二千六百年に当たっていて、東京で第十二回オリンピック大会が開かれることになっていた。しかし国際連盟から離脱して以後の日本に対する内外の批判を受けて、米内内閣は退陣の前日（七月十五日）、イタチの最後っ屁のように「開催取止ヲ適當」とする閣議決定を出していた。

それに代わつて「八紘一宇」「万世一系」といった空想的精神論がしきりに吹聴されるようになった。かつ十月に実施された第五回国勢調査で総人口が初めて一億人を突破したことが発表されるなど、国威発揚論が盛り上がった。近衛に内閣首班が下命されたのは以上のような経緯になっている。

第二次大戦が終わつて戦犯指定を受ける前、彼は連合国軍の取り調べで、

——挙国一致体制を作ることによって、軍部の暴走に歯止めをかけることができると考えた。

と述べている。

しかし大政翼賛会は、実際には軍部の御用機関となり、国民同士を監視させ、国家による統制を強化することにな

った。戦争の回避には何ら役立たなかった。むしろ政財界を巻き込んで、対米英戦突入への弾み車となってしまった。

日本政府は一九四一年の四月、ソビエト連邦共和国と「日ソ中立条約」を結んだ。

にもかかわらず日本の陸軍は

①極東に動乱勃発

②極東兵力の西送

③ソ連政権の崩壊

などが起これば、ただちにソ連領内に侵攻する計画を進めていた。

——ノモンハンの恨みを晴らす。

という並々ならぬ決意があった。

首相としての近衛は、すでにして政府間の約束か、軍部の圧力かの板挟みに陥っていた。以後しばらく、彼は内外の様々な動きに「臨機応変」または「柔軟」に対応するこゝとで時を稼ぐことができた。だが翌四一年十月十五日、遂に近衛はすべてを放り出すことになる。

## 二

ソ連は陸軍参謀本部の予想に反して、対ナチス・ドイツ戦で粘り強さを示しつつあった。ノモンハンで関東軍を一

蹴したジューコフが元帥としてレニングラード防衛線を描いていた。

本来であれば思想的に対立関係にあるはずのイギリスがソ連を支援する腹を固め、そのイギリスの要請に基づいてアメリカ合衆国がヨーロッパ戦線に参入するのは時間の問題となっていた。そうこうするうち、アメリカ、イギリス、オランダの三国は日本に対して経済的圧迫をかけてきていた。これに中国を加えた、いわゆる「A B C D包囲網」がそれである。

石油、ゴム、錫、銅など軍需物資を輸入する途が閉ざされつつあった。この時点で国内に備蓄されていた主な軍需物資は、重油が一月半分、航空機用揮発油が十五か月分、普通揮発油は二か月分に過ぎなかった。

企画院の総裁・鈴木貞一（国務相兼務、陸軍中将）は「現状を以て推移せんか、帝国は遠からず瘦衰起つ能わざるべし」

と警告を発していた。

また、海軍は軍事物資の生産力について、次のような日米比較を密かに行っていた。

石油生産量は一对数百、製鋼生産力是一对二十、石炭産出量是一对十、電力生産量是一对六、航空機生産力是一对五、船舶保有量是一对二、工業労働者数は一对五。いずれ



をとつても敵する相手ではない。こうしたことから、陸軍参謀本部はその打開策を短期決戦に求めようとした。

折からワシントンでは、その年の四月から駐米日本大使野村吉三郎（海軍大将）、前駐独大使・来栖三郎の兩名が、アメリカ連邦政府の国務長官コーデル・ハルと外交交渉を行っていた。ただしそれは、戦争回避の道を最優先にしたものではなく、いかに日本の主張を貫くかに重点が置かれていた。戦争という手段も選択肢の一つだったという点において、通常の和平交渉ではなかった。

交渉の焦点は表向き「中国」だったが、実態は満州における利権だった。

日本の主張は「日本が中国に保有する利権と満州国の承認」だったし、アメリカの立場では「日本の日独伊三国同盟からの離脱」「日本軍の中国からの撤退」だった。

十九世紀、にわかに台頭して列強の仲間入りを果たした二つの国が、太平洋をはさんで、中国およびアジアでの利権を争ったといっている。アメリカはハワイとフィリピンを領有していたから、太平洋を「わが庭」とする野心がなかったとはいえない。

中国・アジアに触手を伸ばそうとするアメリカに対し、日本は同じ地域に鉱業資源を求めていた。となると南太平洋に日本が統治する諸島が、潜在的な前線として浮上する

のは当然といえた。

野村―ハル会談に緊張感をもたらしたのは七月二日の御前会議で決定された「情勢の推移に伴ふ帝国国策要綱」と、同月九日に発動された関東軍特別演習である。七月二日の御前会議は前月二十五日に大本営政府連絡会議が決定した「南方施策促進に関する件」いわゆる南部仏印進駐方針を受けたもので、そこには対ソ戦を準備するとともに、

——南進のために英米戦を辞せず。  
と明記されていた。

関東軍特別演習は満州に陸軍二十四個師団七十万の兵力を集めた実戦さながらの演習だったが、真のねらいは一気にソ連領に侵入し、ナチス・ドイツ軍と呼応して東西からソ連軍を圧迫することにあつた。そのねらいを察知した外相豊田貞次郎は演習中止を命ずる特使を関東軍に派遣するとともに、大本営政府連絡会議で「対ソ外交交渉要綱」を強引に決定した。

それには  
——ソ連が日ソ中立条約に違反しない限り、日本がこれを侵すことはない。

という一条が盛り込まれていた。  
豊田はただちにそれをソ連に通告し、このために関東軍の思惑は封じ込められた。こうして満州を戦争の引き金と

する工作は阻止されたが、大勢を変えるには至らなかつた。

三

このとき海軍は、石油資源の確保を図るため南方への進出を強く求めていた。併せて第一次大戦で手に入れた旧ドイツ帝国領南洋諸島を足がかりに、太平洋を抑えようというのである。

実際、ヨーロッパ戦線でフランスとオランダがナチス・ドイツに占領され、両国政府はイギリスに亡命していたから、東南アジアにおける両国の植民地（フランス領インドシナ＝現ベトナム、ラオス、オランダ領インドシナ＝現インドネシア）は、空室家も同然たつた。

この日本帝国海軍の思惑は、アメリカ連邦政府も察知していたが、最大の関心事はヨーロッパ戦線の成り行きであったし、政治的・軍事的目標は一貫して「打倒ナチス」に向けられていた。

ところが北アフリカでナチス・ドイツのロンメル戦車軍団がフランス軍を蹴散らし、ロンドンではドイツ空軍機の爆撃に悩まされていた。このためアメリカ合衆国の軍需工場はヨーロッパ向け援助物資の生産に追われていた。

つまりアメリカ合衆国は日本の軍事的・帝国主義的野望

——中国およびアジアを包含する「大東亜共栄圏」構想——に深くかかわりあっている余裕がなかつた。そのために合衆国政府は、いずれ戦うことになるとしても、日本との武力衝突はなるべく先に延ばす作戦を立てた。

ただし日本への圧力をかけることも忘れてはいなかつた。まずアメリカ合衆国政府が打った手は、七月二十五日付で在米の日本人資産を凍結したことだつた。ニューヨークにあつたモリムラ・ブラザーズ・カンパニーはこのときをもつて事実上、閉鎖となつた。

次いで八月一日、アメリカ連邦政府は

——石油製品の対日輸出を全面的に禁止する。と決定した。

明らかに対日開戦決意の表明であるにもかかわらず、ワシントン・D・Cでは駐米日本大使・野村吉三郎と国務長官ハルトとの交渉が継続され、さらに八月七日に野村大使を通じてもたらされた

——近衛首相とルーズベルト大統領の直接会談はどうか。

という外相・豊田貞治郎の提案を受ける構えすら見せた。実際、東京で日本と交渉に当たっていたジョセフ・ゲル——駐日アメリカ大使は、本国政府に向けて次のような意見を具申ししていた。

日本とアメリカの間にまつたき不毛の戦争の起こる可能性がますます高まるのを避ける為に、本官の持つあらゆる影響力を賭して、次の様に勧告する。

深い祈りを込めた考慮なしに、この日本の提案を斥けないうように。

(中略)

最高の政治行動として、太平洋の平和に対する克服不可能な事態の到来を避ける機会はこのように呈示されている。この機会を逃したならば、太平洋の平和の機会は明白に克服不可能なものとなろう。

これに対して国務長官ハルは、のちに次のように述べている。

日本人は無警告で攻撃すると云う悪名が高い。日本に最初に撃たせると、危険もあるが、アメリカ国民の完全な支持を得る為には、確実に日本人に最初に撃たせる事が望ましい。

軍最高幹部は、米国のみならず、侵略に抵抗しつつある諸国にとって、防備を調えるために時間が必要だと強調していた。従って我々の対日交渉を開始する決定は、我々の自衛再軍備の必要に沿ったものだった。

八月九日から地中海のヤルタ島で始まった米英首脳会談で、イギリスの首相ウィンストン・チャーチルは、

——日本の南進を阻止すべく、対日政策をより強硬に行うべきだ。

と主張した。これにアメリカ大統領フランクリン・ルーズベルトは、

——その問題は私にお任せ願いたい。三か月ぐらい、ベイビー・アロング<sup>1</sup>できるだろう。

と答えたとされている。

ベイビー・アロングとは、「ダダをこねる赤ん坊をあやす」という意味である。

「三か月ぐらい」という言葉が通常の四半期を意味する程度だったのか、対日開戦の準備が整うという意味だったのか、あるいはそのころまで焦らせれば日本が、最初の一発を撃つに違いないという予測を示したのか、真意は分からない。

ヤルタ会談から一か月のち、チャーチルはイギリス議会で次のように発言した。

アメリカは自身が攻撃されなくても極東の戦争に加わり、最後の勝利が保証される、と云う可能性は、私がルーズベ

ルト大統領とこれらの問題を語り合つた大西洋会談以来のものである。

この会談のあと、アメリカ海軍が行つた太平洋諸島への兵力増強を見ると、ルーズベルトは十一月下旬から十二月上旬にかけてのころを「危険水域」と見ていた節がある。

八月十四日、米英の首脳は共同宣言を世界に向けて發表した。いわゆる「大西洋憲章」がそれであつて、これが対日戦線における連合国軍の共通認識となり、やがては国際連合憲章のベースとなつていく。

~~~~~ 補注 ~~~~~

阿部信行 あべ・のぶゆき／1875～1953。石川県に生まれ一八九七年陸軍士官学校卒、〇七年陸軍大学校を出てドイツ、オーストリアで過ごした。三三年大将に進み二・二六事件後予備役。三九年首相に指名されヨーロッパに起こった第二次大戦に不介入を声明したが陸軍の支持を得ることができず辞任した。四四年朝鮮総督、戦後A級戦犯にリストアップされたが被告から除外された。

米内光政 よない・みつまさ／1880～1948。岩手県に生まれ一九〇一年海軍兵学校卒、一四年海軍大学校を出て一八年ウラジオストック派遣軍司令部付、一九年軍令部参謀、二〇年から二二年までベルリン駐在武官。帰国後、二八年第一遣外艦隊司令官、三二年第三艦隊司令長官、三六年の二・二六事件では軍艦を芝浦に回航させことあらば陸軍と戦う姿勢を示した。三六年連合艦隊司令長官、四〇年首相。陸軍が大臣を出さなかつたことで瓦解したが、四四年小磯国昭に協力し海軍大臣として和平摸索内閣を編成した。ポツダム宣言受諾後も戦後処理に尽力し、公職追放を免れた。

政党の解党 太平洋戦争開戦前の政党解党は、一九四〇年六月十一日に行われた聖戦貫徹議員連盟の勧告に基づいて行われた。七月六日社会大衆党、同十六日政友会久原派、同三十日政友会中島派、八月十五日民政党が解党を決議し、十月十三日に大政翼賛会が発足した。

第五回国勢調査 朝鮮、台湾、満州まで調査が及んだ。人口一億

人というのはその合計であつて、第二次大戦後のそれとは意味合いが異なる。

鈴木貞一 すずき・ていいち／1888～1986。千葉県に生まれ一九一七年陸軍大学校を出て参謀本部に所属。四〇年中将、四一年四月第二次近衛文麿内閣で国務大臣兼企画院総裁に就任した。東条英機内閣でも留任し、太平洋戦争開戦を支持した。第二次大戦後、A級戦犯として終身刑の判決を受けたが五五年釈放となった。

野村吉三郎 のむら・きちさぶろう／1877～1964。和歌山県に生まれ一八九八年海軍兵学校卒、一九二二年軍令部次長、三二年第三艦隊司令長官に就任し爆弾テロで右眼を失明した。三七年予備役となり学習院院長。第二次近衛文麿内閣で駐米大使、太平洋戦争中は枢密院顧問だった。五四年 参院議員、のち日本ビクター社長も務めた。

来栖三郎 くるす・さぶろう／1886～1954。横浜市に生まれ東京高等商業学校を出て外務省に入った。駐ベルギー大使のち駐独大使、四一年野村ハル会談を補佐するためアメリカに渡つた。

コーデル・ハル Cordell Hull／1871～1955。弁護士、テネシー州議会議員、裁判官を経て一九〇七年に連邦下院議員に当選した。三一年に連邦上院議員に当選し、三三年からルーズベルト大統領の下で国務長官。対日交渉では「ハル・ノート」を日本政府に突き付け太平洋戦争の原因を作つた。四三年に「国際連合」(The United Nations)の設立を提唱した。四五年ノーベル平和賞を受けた。

関東軍特別演習 「関特演」と呼ばれる参謀本部主導によるソ連

軍強襲作戦。中心的な立案者は参謀本部作戰部長の田中新一で、ナチス・ドイツ軍と呼応し陸軍三十四個師団をもってソ連軍を東から攻撃する計画だった。陸軍省、海軍および天皇の反対にあつて「関特演」は不発に終わったが、七十万の兵士と馬匹十四万が集結し、この大兵力が東南アジアや西南太平洋諸島に転進していった。

豊田貞次郎 とよだ・ていじろう／一八八五～一九六一。一九〇五年海軍兵学校を出て一年からイギリス・オックスフォード大学に留学した。三二年海軍省軍務局長、三八年航空本部長、四〇年海軍省次官、四一年大将に昇進し退役して第二次近衛文麿内閣で商工務大臣、のち松岡洋右外務大臣の後を受けてこれを兼務した。近衛内閣瓦解とともに民間に移り日本製鉄社長、銃統統制會會長、四五年四月鈴木貴太郎内閣で軍需相兼運輸通信相として入閣した。

ジョセフ・グルー Joseph Clark Grew／1880～1969。一九〇二年ハーバード大学を出てカイロ総領事館書記官、メキシコ、ロシアのアメリカ大使館に勤務、第一次大戦勃発時は駐ドイツ大使館参事官。アメリカ参戦の時はウイン代理公使だった。対ドイツ休戦条約備交渉を担当し、その後、デンマーク公使、スイス公使を歴任した。二四―二九年国務次官、三二年に駐日大使として赴任し、日米開戦回避に尽力した。四四年国務相極東局長、同年十二月国務次官、ポツダム宣言起草では天皇制存続を主張した。六〇年に勲一等旭日大綬章が贈られた。

大西洋憲章 全文は以下のようである。

アメリカ合衆国大統領及び連合王国における皇帝陛下の政府を代表するチャーチル総理大臣は、会合を行った後、両者が、世界

の一層よい将来に対するその希望の基礎とする各自の国の国政上のある種の共通原則を公にすることは正しいことであると認める。

第一に、両者の国は、領土たるとその他たるとを問わず、いかなる拡大も求めない。

第二に、両者は、関係国民の自由に表明する希望と一致しない領土変更の行われることを欲しない。

第三に、両者は、すべての国民に対して、彼らがその下で生活する政体を選択する権利を尊重する。両者は、主権及び自治を強奪された者にそれらが回復されることを希望する。

第四に、両者は、その現に存する義務に対して正当な尊重を払いつつ、大国たると小国たるとを問わず、また、先勝国たると戦敗国たるとを問わず、すべての国に対して、その経済的繁栄に必要な世界の通商及び原料の均等な開放がなされるよう努力する。

第五に、両者は、改善された労働条件、経済的進歩及び社会保障をすべての者に確保するため、すべての国の間の、経済的分野における完全な協力を作り出すことを希望する。

第六に、ナチ暴政の最終的破壊の後、両者は、すべての国民に対して、各自の国境内において安全に居住することを可能とし、かつ、すべての国のすべての人類が恐怖及び欠乏から解放されて、その生命を全うすることを保証するような平和が確立されることを希望する。

第七に、このような平和は、すべての人類が妨害を受けることなく航行を可能ならしめるものでなければならない。

第八に、両者は、世界のすべての国民が、実際のおよび精神的のいずれの見地からみても、武力の使用の放棄に到達しなければならぬと信ずる。陸、海および空の軍備が、自国の国境外にお

ける侵略の脅威を与えまたは与えることのある国々において引続き使用される限り、いかなる将来の平和も維持され得ないのであるから、両者は、一層広範かつ恒久的な一般的安全保障制度が確立されるまでは、このような国々の武装解除は欠くことのできな
いものであると信ずる。両者は、また、平和を愛好する国民のため、恐るべき軍備の負担を軽減する他のすべての実行可能な措置を援助し、かつ、助長する。

フランクリン・D・ルーズベルト
ウインストン・S・チャーチル

057 駆け引き

第五十七

駆け引き

一

日本では、陸軍参謀本部が早々と米英戦を決意していたのに対し、海軍は態度を決めかねていた。だからといって陸軍が開戦に積極的ないし好戦的、海軍が消極的ないし和平的であつたということには直結しない。

軍というものはそもそも戦うために存在するのであつて、平和的な軍隊というものがあるとすれば、それは御伽噺に出てくるおもちやの兵隊でしかあり得ない。戦意という点で一九四一年の大日本帝国陸海軍は、ともに先鋭化していたといつていい。

しからば何ゆえに陸軍が早々と対米英開戦を決意し、海軍が決断を躊躇したかという点、戦略ないし戦術の展開方法の違いであつた。陸軍が開戦と同時に連合国軍と戦闘に突入するには、数十万の兵、武器・弾薬、食糧などを周到に準備しなければならなかつた。

宣戦を布告してから輸送船を繰り出していたのでは到底

間に合わない。どころか領海内と公海上を問わず、輸送船はたちまち魚雷の餌食になってしまう。

対して海軍は、公海上に艦隊を待機させ攻撃機の編隊を飛ばせば、宣戦布告と同時に敵基地を攻撃することができ、かつ海上で会敵し、ともに砲撃を交わすのは数時間、長くても数日に過ぎない。

海軍は開戦を躊躇したのではなかつたが、日米和平交渉の成り行きをぎりぎりまで見届ける余裕があつた。ここに陸軍との間で微妙な駆け引きが行われた。

とはいえ、目処を設定しなければならぬ。

九月六日に天皇臨席で開かれた御前会議で基本方針が決まつた。

「帝国国策遂行要領」がそれである。

一、帝国は自存自衛を全うする為対米（英蘭）戦争を辞せざる決意の下に概ね十月下旬を目途として戦争準備を完整す

二、帝国は右に並行して米、英に対し外交の手段を尽して帝国の要求貫徹に努む

三、前号外交交渉に依り十月下旬頃に至るも尚我要求を貫徹し得る目途なき場合に於ては直ちに対米（英蘭）開戦を決意す

——戦争の準備は進めるが、外交努力を尽す。
という。

外務省は首相近衛文麿とアメリカ大統領ルーズベルトとの直接会談を計画しており、

——その結果を見て断を下してはどうか。
という見解を示していた。

在ニューヨークの三井物産支店の宮崎清支店長を通じて非公式秘密折衝が続けられ、在モスクワ日本大使館を通じて対英和平工作が行われていた。

アメリカ合衆国政府國務長官のコーデル・ハルは
——世界の平和のために、今こそアメリカ合衆国と大日

本帝国との関係を改善しなければならぬ。
と繰り返し口にしてきたから、外務省は

——何とか打開の道が開けるかもしれない。
と考えていた。

海軍軍令部の意見も同様だった。ただし外務省ほどには樂觀的でなかった。

——日独伊三国同盟が障害になる。

盟約を結んでいるナチス・ドイツとファシスト・イタリアがヨーロッパ、北アフリカ、バルカン半島で連合国軍と砲火を交えているのである。日本のみが英米蘭仏と世界平

和のための協調路線を保持できるなどというのは妄想に近い。
い。

——開戦、開戦、開戦！

と連呼する陸軍に手を焼きながら、外相東郷茂徳以下の外務官僚たちは、アメリカ國務長官ハルの態度が煮えきらないことに苛立ちを感じ始めていた。

実はハルは、

——遠からず対日開戦あるべし。

の腹を決めていたが、時間かせぎのために表向きノラリクラリを続けていたに過ぎない。

そのうちに「帝国国策遂行要領」文中にある十月上旬が近づいた。

この字句が帝国国策遂行要領に盛り込まれたのには、氣象の条件が背景にあった。米英戦に踏み切った場合、日本にとってソ連が極東に配備している軍隊が後背の不安材料だった。軍事行動を起こすとすれば、シベリアが凍土に覆われ、ソ連軍の動きが封じられる冬が望ましい。

かつ、東南アジア地域での航空機による対英作戦——シंगाポールからインドを目指す作戦——を考えると偏西風が弱まる十二月より前に実施するのが理想的である。

そこで陸軍参謀本部は九月二十五日、大本営政府連絡会議で「外交交渉の期限は十月十五日」とする案を提出し、

海軍の了解を得た。国策遂行要領にも沿うもので、異論を唱えるには相当の材料がなければならぬ。

一九四一年十月の時点で、第二次大戦に参加した主要国首脳のうち、いちばん腹が据わっていないのは近衛文麿であったかもしれない。

盧溝橋事件、上海事変、南京占領といった一連の軍事行動で中国大陸に深入りし、東亜新秩序を打ち上げ、大政翼賛会を結成し、閔白政治で共産主義や社会主義を弾圧し、軍部を増長させ、かつフランス領インドシナへの日本帝国陸軍進駐をこり押しした。

その挙句、いざ対英米開戦を迫られると腰が引けてしまったのはどういふことだろう。

——アジア世界からの英米仏蘭勢力の排除。

を訴えていた彼は、要するにアメリカやヨーロッパへの劣等感が鬱積していたに過ぎなかったのかもしれない。

陸海軍から「十月十五日」と期限を切られたとき、近衛の内に潜在していた米英への畏怖心が頭を擡げた。

それとも単純に

——戦争のボタンを押した首相として歴史に名を残したくない。

と考えたのか。

二進も三進も行かなくなった近衛は十月十五日、

支那事変の未だ解決せざる現在に於て更に前途の透視すべからざる大戦争に突入するが如きは、支那事変勃発以来重大なる責任を痛感しつつある臣文麿の到底忍び難き所なり。

という上奏文を提出して首相を辞任してしまった。「支那事変の未だ解決せざる現在」を作ったのは、「国民政府を相手にせず」と表明した自分自身ではないか。

近衛の首相辞任で「十月十五日を以て期限とする」決議はご破算になった。近衛は内大臣・木戸幸一に心情をこう告げた。

臣は衷情を披瀝して東条陸軍大臣を説得すべく努力したり。之に対して陸軍大臣は、時期を失せず此の際開戦すべきことを主張して已まず。懇談四度に及びたるも終に同意せしむるに至らず。

心情を吐露された木戸は、反対に近衛の無責任を諷刺とはなはだしかった。

近衛は一個人の立場ではない。一国の命運を担うべき内閣総理大臣が、国家大事の事態を眼前にして收拾の方策を

放り出してしまったのだから当然であろう。

代わって首相に任命されたのは、陸軍大将・東条英機だった。彼は首相のほかに陸軍大臣と内務大臣を兼任することになった。近衛の後任を選定するとき、

——陸軍を抑えるには陸軍で。

という内大臣・木戸幸一の意見が、東条内閣の発足に重きを占めたとされる。

二

一九四一年十一月五日、大本営政府連絡会議は新しい「帝国国策遂行要領」を策定した。

一、帝国は現下の危局を打開して自存自衛を完うし大東亜の新秩序を建設する為此の際対米英蘭戦争を決意し左記措置を採る。

(1) 武力発動の時機を十二月初頭と定め陸海軍は作戦準備を完整す。

(2) 対米交渉は別紙要領に依り之を行う。

(3) 独伊との提携強化を図る。

(4) 武力発動の直前泰との間に軍事的緊密関係を樹立す。

一、対米交渉が十二月一日午零時迄に成功せば武力発動を中止す。

一方、アメリカ政府内では十月六日、陸軍長官スチムソンが「我々の地歩を確保するには、なお三か月を要する」と対日交渉の引き延ばしを要請していた。このため國務長官ハルは「昨は妥協、今日は決裂」(『機密戦争日誌』)というノラリクラーを演じ続けた。

ために、ワシントンでの外交交渉は大きな進展を見せなかった。だが、駐米大使野村はアメリカの真意を見抜いていた。彼は東条内閣で外相に起用された東郷茂徳に当てて打電した。

今日には太平洋戦に世論の反対の少なきを見て、この方面より参戦することも十分あり得べし。

アメリカ合衆国内での世論を見るに、太平洋を挟んでの対日開戦に反対する意見が少なくなってきた。つまりアメリカ政府は、まず日本と交戦状態に入ること、日本が同盟を結んでいるナチス・ドイツに対して宣戦を布告しよう」と企んでいる、というのである。

野村の読みは正しかった。

十一月二十五日、大統領ルーズベルトは閣議を招集し、対日戦に踏み切る考えを示し了解を得た。

ねらいは

——ドイツ。

である。

日本との戦いは、対ナチス・ドイツ戦に参加する手段に過ぎなかった。

ただし、そのために戦いの相手として日本を選んだアメリカ政府の判断は、正しいとはいえなかった。日本は「手段」として安易に取り組めるほどヤワな相手ではなかったのだ。

二十六日、国務長官ハルは日本の駐米大使野村を国務省に招き、アメリカ合衆国としての最終提案を告知した。そこには従来から主張してきた

「日独伊三国同盟の破棄」

「日本軍の中国からの撤退」

という二項目に加え、

「満州国の解消」

が新たに盛り込まれていた。

振り出しに戻った、というところか、日本から見れば虚仮にされたのも同然だった。

——いまさら何を……。

と言ってもそれは愚痴というものだった。

いわゆる「ハル・ノート」がそれで、これによりアメリカ政府は事実上、外交交渉の打ち切りを宣言したのだった。

翌二十七日、ハルは

「私は手を洗った」

と陸海軍長官に日本との交渉を打ち切ったことを告げ、併せて海軍作戦部長スタークはハワイ駐在の太平洋艦隊司令長官キンメルとアジア艦隊司令長官ニミッツに、次のような警告の電報を発信した。

対日交渉はすでに終わった。日本側の攻撃行動は数日内に予期される。日本軍の数、装備および編成は、フィリピン、タイ、またはクラ地峡、あるいはおそらくボルネオ等に対する海陸両面の作戦を示唆している。

一方、陸軍参謀総長マーシャルは、フィリピン駐在のアメリカ極東軍司令官マッカーサー（中将）に宛てて、次のように打電した。

日本の将来の行動は予測し難いが、敵対行動はいつでも予期できる。もし、敵対行動を避けることができなければ、米国は日本が最初の明白な行動に出ることを希望している。

三

日米開戦の直前、日本海軍はハワイ真珠湾に集結しているアメリカ太平洋艦隊に壊滅的打撃を与えることに全精力を集中した。このために海軍は、ユリウス・オットー・キーンというドイツ人をハワイにスパイとして潜入させて情報の収集に当たらせていた。

しかしより詳細な情報が必要と判断した軍令部は、一九四一年三月に吉川猛夫という予備役少尉を民間人「森村正」の名で外務書記生として送り込んだ。

彼は真珠湾を出入りするアメリカ太平洋艦隊の艦船の数、その編成や周期、防御体制の情報を事細かに調べ日本に送信した。

「朝晩の真珠湾を見張るためには、春潮楼に泊まること
が最も都合がよい。そこで、芸者やメイドに惚れ込んでう
つつをぬかす風を装わなければならなかった」

というあたりは、忠臣蔵の大石内蔵助を思わせる。

こうして本国に送信された通信は「A電」と呼ばれ、その数は計百七十七通にのぼった。

また、陸軍参謀本部は当面の敵となる香港、マレー半島、フィリピンに展開している連合軍（アメリカ、イギリス、

オランダ、オーストラリア）の兵力を、最大で陸兵十三万人、航空機約五百機と見積もっていた。参謀本部が前年の夏ごろから、民間人を装った大尉、少佐クラスの士官を、現地に派遣して情報の収集に当たらせていたのである。それぞれの推定値は次のようだった。

香港　イギリス軍陸兵　約一万二千人

航空機　若干

マレー　オランダ軍陸兵　約六万七千人

航空機　約三百二十機

フィリピン

アメリカ軍陸兵　約四万二千人

フィリピン軍陸兵　約四万八千人

航空機　約百七十機

これに対して日本が開戦時に投入することを計画していたのは、陸兵二十一万人、航空機二千四百機（陸軍七百機、海軍一千七百機）だった。近代戦争においては、一の防衛兵力に対して三倍の攻撃兵力が必要とされている。参謀本部は奇襲的攻撃と四倍の航空戦力をもって、連合軍を圧倒する考えだった。

海軍力はどうか。

日本の連合艦隊は山本五十六（大将）を総司令官に、南雲忠一（中将）が率いる機動部隊、近藤信竹（同）が率いる南方部隊、井上成美（同）が率いる南洋部隊で構成されていた。

日本時間十二月六日にアリューシャン列島ヒトカツプ湾をひそかに出港した機動部隊は、八日零時を期してハワイ真珠湾を襲い、南方部隊はマレー、フィリピン方面、南洋部隊はグアム、ウエーキ方面に出撃した。

機動部隊は空母六、戦艦二、重巡洋艦二、軽巡洋艦一、駆逐艦九、潜水艦三。

南方部隊は戦艦二、重巡洋艦七、軽巡洋艦五、駆逐艦四十八、潜水艦十四。

南洋部隊は軽巡洋艦三、駆逐艦八。

さらに大型戦艦「長門」が控え、超弩級戦艦「大和」「武蔵」が完成しつつあった。

航空戦力は機動部隊が九七式艦上攻撃機百四十三、九九式艦上爆撃機百二十九、零式艦上戦闘機七十八の計三百五十機。南方部隊には陸軍六百三十九機、海軍五百六十三機。南洋部隊には五十四機が配備されていた。

対するアメリカ太平洋艦隊が保有するのは航空母艦四、戦艦五。

イギリス極東艦隊に空母はなく、戦艦一、重巡洋艦二。

これであれば、向こう一年か二年は戦えるであろう。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

軍令部 大日本帝国海軍の作戦司令部。陸軍は参謀本部がそれに当たる。組織としては海軍大臣の所管するところだが軍令系統では連合艦隊の上位に位置し実質的に戦争遂行の中樞だった。

木戸幸一 きど・こういち / 1889 ~ 1977。木戸孝允の養子・孝正の子。東京に生まれ一九三〇年内大臣秘書官長、宮内省参事官などを経て三十七年第一次近衛文麿改造内閣で文相、平沼騏一郎内閣で内相、四〇年内大臣となり侯爵。第二次大戦後、A級戦犯として逮捕され東京裁判では東条英機を首相に推薦し、かつ軍部の暴走を助長したとして終身刑の判決を受け、五五年に出所した。戦前・中および終戦時のことを記した『木戸幸一日記』がある。

スチムソン Henry Stimson / 1867 ~ 1950。はじめ弁護士だったが連邦検事となったのをきっかけに国政に関与するようになり、文民出身のフイリピン総督に任命された。日米開戦時は陸軍省長官、のち國務長官となった。

東郷茂徳 とうこう・しげのり / 1882 ~ 1950。江戸時代に朝鮮から薩摩藩にやってきた陶工の朴家に生まれ、「朴茂徳」(パク・ムドク)として幼少期を過ごした。明治維新後に薩摩藩士東郷家の士族株を買い取り、姓を東郷に改めた。一九〇八年(明治四十一)東京帝国大学を出て外務省に入り、一九三三年欧米局長、三四年欧亜局長、三七年駐独大使、三八年駐ソ大使を経て四一年十月、東条英機内閣の外相。四二年九月に大東亜省設置をめぐって東条と対立し辞職した。第二次大戦後、A級戦犯として禁固二

十年の判決を受けたが拘禁中に死去した。

スターク Harold Rainsford Stark / 1880 ~ 1972。アメリカ合衆国海軍の増強を図るべく空母を主体とする艦隊の整備を推進した。特に太平洋、大西洋のそれぞれに超大型空母と超弩級戦艦で構成する複数艦隊を配備して五大洋の軍事行動をカバーしようという「スターク計画」は、のちのアメリカ海軍の基本戦略となった。日米開戦時、海軍省長官。

キンメル Husband Edward Kimmel / 1882 ~ 1968。ケンタッキー州ヘンダーソンで生まれ、太平洋戦争開戦時は太平洋艦隊司令長官兼合衆国艦隊司令長官(少将)を務めていた。真珠湾奇襲攻撃によってアメリカ太平洋艦隊が大きな被害を受けた責任を追及され、同年十二月十七日司令長官を解任され、四二年三月退役した。

ニムン Chester William Nimitz / 1885 ~ 1969。テキサス州フレデリックスバーグで生まれ、第一次大戦のとき大西洋潜水艦隊部隊参謀長だった。四三年アジア艦隊旗艦戦艦「オーガスタ」艦長、日米開戦時は海軍大将。キンメル解任後の太平洋艦隊司令長官に就任し、四四年十二月元帥に昇進し、四五年九月二日アメリカ合衆国代表として日本の降伏文書に署名した。日本通であって、特に東郷平八郎に心酔していた。その東郷の旗艦である戦艦「三笠」の保存に私財を寄贈したことも知られる。

マーシャル George C. Marshall / 1880 ~ 1969。一九〇一年ヴァージニア陸軍学校を卒業し第二次世界大戦中は参謀総長。四七年國務長官、五〇年国防長官。第二次大戦後のヨーロッパ復興政策「マーシャル・プラン」を立案し、この援助で西側諸国は復興の足掛りを得た。しかしヨーロッパ諸国に流入したドルがそ

の後の経済問題として長く残り、かつ東西冷戦構造を決定的にした。五三年ノーベル平和賞を受けた。

マンカーサー Douglas MacArthur / 1880 - 1964。一九三〇年アメリカ合衆国陸軍参謀総長を最後に一度退役しフィリピン政府軍事顧問としてマニラに移住した。日米開戦の直前、現役に復帰し中将・在フィリピンアメリカ軍司令官、四四年元帥となった。連合国最高司令官として日本の占領統治を担当、のち朝鮮戦争で原爆を投下しようとしたトルーマン大統領と対立し解任された。

吉川猛夫 よしかわ・たけお / 1913 - 1993。「森村正」の偽名で在ハワイ日本領事館に赴任し、真珠湾に停泊するアメリカ海軍の艦船や湾の警備体制などを詳細に調べ上げた。日本軍の奇襲攻撃のあとアメリカ連邦捜査局 (FBI) に逮捕されアメリカ本土に収監されたが四二年日本に送還され他。軍に復帰することなく、郷里の松山市でひっそりと暮らした。

吉川の手記 「真珠湾スパイの回想」朝日パノラマ。ちなみに文中に登場する「春潮楼」は在ハワイ日本人を相手にした料亭で、のち「花の家」と改称した。

山本五十六 やまもと・いそろく / 1884 - 1943。経歴の詳細は本文。アメリカ合衆国の事情に精通していたことは事実で、米英決戦には反対だったが、「自分がやらなくても他の誰かがやる」という考えから、短期決戦・講和の道を探った。太平洋戦争の転機に撃墜・殉職したため一部で神格化された伝説が残された。

南雲忠一 なぐも・ちゅういち / 1887 - 1944。山形県に生まれ一九二〇年海軍大学校を卒業した。三二年軍令部第二課長、三九年中将、四〇年海軍大学校校長、四一年第一航空艦隊司令長

官、四四年中部太平洋方面艦隊司令長官となりサイパン島攻防戦で戦死した。

近藤信竹 こんどう・のぶたけ / 1886 - 1953。大阪に生まれ一九三五年軍令部第一部長、三八年第五艦隊司令長官、三九年軍令部次長、四二年第二艦隊司令長官として南方作戦を指揮した。終戦時は支那方面艦隊司令長官・軍事参議官だった。

井上成美 いのうえ・しげよし / 1886 - 1975。宮城県に生まれ、一九〇九年海軍兵学校卒、のち海軍大学校卒。在イタリア日本大使館武官、海軍大教官を経て三二年海軍省軍務局第一課長、三六年少将となり横須賀鎮守府参謀長。三七年軍務局長のとき日独伊三国同盟に強行に反対したが果たせず、三九年支那方面艦隊参謀長、中将・航空本部長、四一年第四艦隊司令長官となり、太平洋戦争の緒戦ではゲアム、ウェーキ、ラバウルと転戦、四二年海軍兵学校校長、四四年海軍省次官、四五年大将・軍事参事官。戦後は塾の教師をして世に出ることがなかった。

058 誤認

第五十八

誤認

一

一九四〇年から四一年秋にかけて、開戦直前の時点で連合国側が日本の軍事力をどのように評価していたかを見てみよう。

一九四〇年にマレーに派遣されたオーストラリア第八師団の兵士たちは、次のような文書を配布されていた。

日本軍は残忍で、高度の武装と訓練を身につけている。その肉体的耐久力は偉大なほどある。敵をごまかす技術にたけ、マレーには膨大な第五列を配置し、豊富な上陸作戦の経験を持っている。日本軍は猛烈なスピードで山野を突進し、数日間は補給なしで行動できる。

密林国でこのような日本軍に対抗するには、静かな防御は不適当で、どんな場合でも、敵に遭遇したら攻撃するほかはない。したがって全将兵はまず、ジャングル戦の訓練に熱中すべきである。

ところがアメリカはそうは見えていなかった。

一九四一年九月に発行されたアメリカの航空雑誌『エビエーション』は、日本の航空機技術を次のように報道していた。

日本の軍民の操縦士は、世界一の事故率を示し、日華事変では中国の操縦士に劣り、その年次の養成数は陸海軍を合せて千人足らずである。大空軍の建設には間に合わない。航空技術は模倣一点張り、アメリカ、イギリス、ドイツ、イタリア、ソ連に遠く及ばない。

外国の製品権を買っても、その原型の性能を出すことすらできない。アメリカの航空専門家たちは躊躇なく、日本の主要な軍用機が旧式か旧式になりつつあると断定できる。

比較の対象となったのは、アメリカ陸軍が制式採用していた戦闘機「バッファロー」だった。航続距離七百五十九マイル、最高速度二百九十五キロ/時、高度四千五百メートル、十二・七ミリ機銃×四基を装備。イギリス陸軍にも供給され、アジア地域におけるイギリス航空兵力の主力をなしていた。

「イギリス本土の防衛用としては、スピードが遅い。し

かしマレーでは十分に間に合う」

マレーのイギリス軍極東総司令官ブルック・ポーハム（中将）は、戦端が開かれる直前の一九四一年十二月三日、記者会見でこう述べて対日戦に自信を示していた。

さらにアメリカ海軍省がまとめた敵国情報には、次のようなコメントがあった。

日本の飛行機乗りはいまだかつて航空母艦の甲板から発進したこともなければ、着艦したこともない。せいぜい凡庸な飛行機乗りになかなれない彼等の気短な気質を考えると、将来彼等が母艦からの発着をうまくできるようになるかどうか、疑わしい。

この判断は全く間違っていた。

『エビエーション』誌が「旧式か旧式になりつつある」

と評価した日本の軍用機は、実際のところであろうと当時の世界水準をはるかに凌駕していた。海軍の要請で三菱重工業名古屋航空機製作所が開発した零式艦上戦闘機（零戦）は、航統距離八百八十五マイル（一千四百キロ）、最高速度三百三十五キロ／時、高度五千四百メートル、七・七ミリ機銃×二、二十ミリ機銃×二を装備していた。

二百五十キロ爆弾を装備し、一回の飛行で片道七百キロ

を往復できるこの航空機は、そもそも広大な中国大陸の制空権を掌握することにねらいがあった。つまりその要求仕様は基本的に陸軍の要望に基づいたものであって、陸軍を支援するために海軍が設定したのである。

同時にそれは太平洋にも適用できる性能だった。島を拠点に広大な制空権の網を張ることができ、かつ航空母艦で長駆の爆撃が可能であることを意味していた。

航統距離ばかりでなく、航空機同士の間では高度が重要だった。機銃から発射された弾丸は重力の法則によって落下する。つまり上から攻撃すれば弾丸は真つ直ぐ標的に向かうが、下からの攻撃は命中率が悪い。

遭遇したときいかに相手より早く有利な位置につくか——理論上の最大速度と最高高度を実戦で発揮できるか——が勝敗を分けた。零戦はほぼ理論通りだったのに比べ、バツファローは机上の数字だった。

『エビエーション』誌の評価は、重大な誤認だった。

実際、開戦の直後、フィリピンの基地が日本の航空機に爆撃されたとき、アメリカ軍は

——近くに空母群がいるに違いない。

と見て、懸命に近海を搜索した。

このときフィリピンのマニラにいたダグラス・マッカーサー（当時はアメリカ極東軍司令官、のち連合軍司令長官）

は、のちのちも

「日本軍は空母で近づき、奇襲攻撃をかけてきた」

と語っている。

だがフィリピンを襲った日本の航空機は、はるか遠方、台湾の基地から出撃したのだった。

またイギリス極東艦隊司令官トーマス・フィリップス（中将）は、

——最も近い日本軍の航空基地は四百マイルも離れている。空からの攻撃を受ける心配はない。

と考えた。

このために航空機の護衛なく出港し、ばかりでなく日本の潜水艦に追尾され、[〃]虎の子[〃]のイギリス極東艦隊をあつけなく壊滅させてしまった。

開戦に先立つ十一月、日本との戦争を覚悟したアメリカ合衆国政府が、

——最初の一発は日本に撃たせるべきである。

としたのは、日本軍の戦力をはるかに低く見た分析に基づいていた。

二

相手の力を過小評価したのは連合国軍だけではなかった。

日本の大本営は連合国軍の力を次のように分析した。

一、物的戦力は豊富だが、人的戦力は不十分である。とくに米国は、総力戦態勢確立にともない、その政治社会機構に多くの摩擦、紛糾を招くだろう。

二、軍備は優秀だが、進攻拠点を失ったため、その価値は大いに減殺された。

三、英国の戦争遂行能力は海上輸送力に依存している。だが、米国の海上輸送力は貧弱で、援英に徹底できない。

四、米英の遮断分離はその戦争遂行能力に絶大な影響を及ぼす。とくに、英国と自治領植民地などとの分離は、ついに英国の崩壊を招く可能性がある。

五、米英両国民は生活程度が高く、その低下は苦痛である。戦勝の希望がない戦争継続は社会不安をつくりだし、士気の低下を招く。とくに英国の敗戦が米国に及ぼす影響は極めて大きい。

六、米英ソの提携は不自然である。またルーズベルト、チャーチルの政策は、ややもすれば投機冒険に堕し、両国民は必ずしもその指導に悦服していない。

この分析が行われたのは一九四二年三月現在なので開戦

から四か月目である。この時点で日本海軍は、ハワイ真珠湾奇襲攻撃でアメリカ海軍の出鼻をくじき、マレー沖海戦でイギリス極東艦隊を壊滅させ、残余の連合国軍艦隊をスラバヤ沖海戦、バタビア沖海戦で海中に葬っていた。

また陸軍は四一年十二月二十五日に香港、四二年一月二日にマニラ、二月十日にシンガポールを落とす、オランダ領インドシナの占領も間近、フィリピン・コレヒドール要塞は日本軍の包囲で孤立無援という状況にあった。陸海軍とも、向かうところ敵なしの勢いだったといっている。

東条英機がラジオで

「連戦連勝、ご同慶の至り」

と発言したのはこのときである。

余談だが、「ご同慶の至り」はちよつとした流行語になった。何かの式典に登壇した地方名士が挨拶や祝辞に盛り込んだばかりでなく、庶民が日常の慶事に接したとき、

——それはそれは、ご同慶の至りで。

という具合だった。マッカーサーが脱出したあと、コレヒドール要塞に残された将兵が、ニヤリと笑って

——アイ・シャル・リターン。

とトイレに行く合図にしたのとよく似ている。

穿った見方をすれば、庶民は本能的にこの戦争の空疎さを見抜いていた。

日本の分析はあまりに主観的で、希望的観測に過ぎなかった。だけでなく、自身の力を過大に評価していた。なるほど各戦線で連合国軍は後退に後退を続けていたが、日本とアメリカ合衆国では生産力に格段の差があったし、暗号の解読や統計分析の能力は天と地ほどの違いがあった。

例えば状況分析の第二項目

「軍備は優秀だが、進攻拠点を失ったため、その価値は大いに減殺された」

とあるのだが、航空機の戦いが趨勢を左右するとなれば、陸上の進攻拠点が価値を持つということを大本営は考慮しなかった。敵地を占領し領土に編入するという旧世紀の思考回路が戦略の基礎似合った。

さらにいえば、政府や軍部は自身に内在する齟齬を理解していなかった。正面の敵は東南のイギリス、オランダなのか、太平洋の向こうのアメリカ合衆国なのか、はたまた南方のオーストラリアなのか。

陸軍は

——我らが対すべきは中国、イギリス、オランダである。と考えていた。このため、

——太平洋とアメリカは海軍に任せる。

と陸軍は言った。

ところがその海軍の中には、西進してアメリカ本土を攻め

るべきとする一派と、陸軍と連携して南方を固めるべきとする一派があった。

西進派は航空戦力すなわち航空母艦重視・戦艦不要論、南進派は輸送力重視・大艦巨砲論だった。自軍の中の意志統一がないまま、東条は陸軍の力に押し切られて開戦に踏み切ったことになる。

三

話を日米開戦の前に戻す。

一九四一年の秋、大本営や陸軍参謀本部の内で「和平論」「持久論」が台頭した。

まず政府内に出たのは、開戦のち南方に籠城し、カンリック教界を通じてアメリカ、イギリスと和平交渉を始めようという動きだった。これは近衛文麿の知恵袋とされた産業組合中央金庫理事・井川忠雄などが中心になったとされている。

だがそれは、有利な条件で戦争を続行するための謀略に過ぎなかった。

大本営はもっと大きな誤認を犯していた。

日本帝国陸海軍の中で、戦略立案部門と最前線の間に認識の齟齬が生じていたのだ。

例えば大本営が対米英開戦を決意していたとき、外務省は民間人をも動員して平和的妥協点の模索を並行して進めていた。

しかし陸軍参謀本部は

「宣伝情報の利用に限定し、之を謀略的に利用せざるを可とす」

と冷やかに評し、さして重要視していなかった。

にもかかわらずその陸軍参謀本部の内部で「持久戦」論が持ち上がったのだから、おかしな話だった。

それというのは、

——ヨーロッパ戦線でイギリスがナチス・ドイツに降伏するのを待ち、アメリカが戦意を喪失することに期待する。

という考え方である。

しかしこの案は海軍が真っ向から拒否した。

その筆頭は連合艦隊司令長官の職にあった山本五十六である。

彼は、

——政治というものは、一度決意したらやり通さなければならぬ。

と考えていた。戦争もまた、政治であった。

一八八四年（明治十七）、新潟県長岡に生まれた山本は、やや血縁がつながる河井継之助に強く憧れた。

河井は幕末の長岡藩にあつて執政となり、万余の官軍を引き受けて奮戦して死んだ。生まれる時と場所が違つたなら、一国の宰相を務める器量であつた、とされる。

山本五十六は一九〇四年（明治三十七）、海軍兵学校を出て戦艦「日進」に乗組み、日本海海戦に参加した。このとき事故で左手の指を失っている。のちアメリカに武官として駐在したとき、ハーバード大学に学んだ。

帰国後、空母「赤城」艦長、一九三〇年（昭和五）海軍航空本部技術部長、三四年中将に昇格し、三五年航空本部長、三六年海軍省次官という経歴を持っている。

三八年に日独伊三国同盟が政治課題となつたとき、
——それは対米軍事同盟になる。

として強硬に反対した。武官として駐在したとき、アメリカという国の底力を知つたためだつた。

四〇年、大将に昇格したが、現場の戦闘指揮官であることを理由に日米開戦論議には加わらなかつた。山本が対英米開戦反対論者であることを知つていた参謀本部が、その発言を封じたとも、あるいは山本自身が議論に参加することを忌避したともいわれている。

——戦うなら、乾坤一擲の短期決戦でなければならず、ひるんではならない。

が持論だつた。

山本は海相兼軍令部総長の嶋田繁太郎に書簡を送り、

そろそろ銭勘定する経営家多き由なるも、そんな中途半端にて守勢など固まるものに無之。

少くも英米両主力艦隊を徹底的に撃滅して、太平洋、印度洋より近東經由ドイツと自由に交通し得る態勢まで、作戦は一步も弛め難しと存居候。

と、安易な和平工作論に反対した。

その一方で彼は、連合艦隊旗艦「長門」、戦艦「陸奥」、空母「蒼龍」を敵艦隊と仮定して、航空機による雷撃訓練を強化した。鹿児島湾の佐伯湾に停泊している三艦を目標に、空母から発進した艦上攻撃機、双発陸上攻撃機、艦上爆撃機などが低空から模擬魚雷を撃ち込むというものだつた。

山本はこのとき

「飛行機でハワイを叩けないものか」

と呟いたという。

翌四一年一月、連合艦隊司令長官に就任した山本は海軍大臣・及川古志郎に私信を發した。

日米戦争に於て我の第一に遂行せざるべからざる要項は、開戦劈頭敵主力艦隊を猛撃撃破して、米国海軍及米国民を

して救ふ可かざる程度に、其の士気を阻喪せしむ事是なり。此の如くにして、初めて東亜の要衝に占居して不敗の地歩を確保し、依て以て東亜共栄圏も建設維持し得べし。

談し、次のような結論を得た。
——高度十メートル以下で魚雷を水平に投下すれば、不可能ではない。

同月下旬、連合艦隊司令部は第十一航空艦隊参謀長・大西瀧治郎（少将）に真珠湾攻撃の研究を極秘で依頼した。大西は山本と同じく航空主兵、艦隊無用論者だった。大西の指示で作戦計画を練ったのは源田實という海軍少佐である。

源田は

——これからの海の戦争は、航空母艦が中心になると考えていた。

その意味で彼は山本—大西ラインの直系にあった。ハワイの近くで発艦した航空機によって真珠湾を叩くには二百五十キロ爆弾でなく魚雷でなければならなかった。大日本帝国海軍が保有していた魚雷は、航空機から落とされるといったん水面下六十メートルまで沈み、起動したスクリューで指定深度を確保する。

真珠湾の水深は十二メートルだった。であればこそアメリカ太平洋艦隊は雷撃を受けることなど一切心配していなかった。常識では不可能だったからだ。

源田は第三航空艦隊参謀・淵田美津雄（当時少佐）と相

補 注

ブルック・ポープハム Robert Brooke-Popham / 1878~1953。名を「ポッフアム」とする表記もある。シンガポール陥落直前までイギリス極東司令部の最高司令官だった。第二次世界対戦後、イギリス空軍 (RAF) 司令官となった。最終階級は空軍大將。

トーマス・フィリップス Thomas Spencer Vaughan Phillips / 1888~1941。一九四一年十二月二日イギリス東洋艦隊司令官に就任し、その八日後の十二月十日、マレー沖海戦で沈没した乗艦プリンス・オブ・ウェールズと運命をともにした。最終階級は海軍大將。

雑誌「エビエーション」太平洋戦争前から発行されていた航空専門の雑誌で、現在は「エビエーション&ウイーク」と誌名を變更している。

戦闘機「バッファロー」制式採用後の名称は「プリユースター / F2A バッファロー」。アメリカ海軍に配属された最初の単葉機で、一九三六年に策定された海軍次期艦上戦闘機の要求仕様 (単葉機、折りたたみ翼、引き込み脚、密閉式コクピット) に沿ってプリユースター社、グラマン社、セバスキー社が競争試作に参加し、プリユースター社が受注に成功した。航続距離約一千二百七十キロ、最大速度二百九十五キロ / 時、十二・七ミリ機銃四基を装備し、最高高度は六千メートルだった。しかし実際はそれよりかなり遅かったといわれる。

マッカーサーの誤解 『マッカーサー回顧録』による。ついでな

がら当時のアメリカでは、「日本人は乳幼児のころ母親の背中に背負われて育つため、多くが三半規管に異常を持ち、満足に飛行機を操縦できない」と考える人が多かった。マッカーサーもそうした俗信のとりこだった。

イギリス極東艦隊の壊滅 開戦直後、イギリス極東艦隊は旗艦「プリンス・オブ・ウェールズ」などを日本軍航空機の攻撃で失った。日本軍は艦船対航空機という新しい戦法を開きながら、自身はその対応ができず自滅していく。

イギリス極東艦隊 インドネシア・オーストラリア・インド地域を所管する ABD A (American-British-Dutch-Australian) 司令部の中核部隊だった。

戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」、巡洋戦艦「レパルス」を中心とする Z 部隊。ここに大型空母「インドミタブル」が配備されているはずだった。ところがインドミタブルは大西洋を横断してインド洋に向かう途中、四一年十一月三日、ジャマイカ沖で座礁し航行不能に陥っていた。インド洋に到着したのは四二年一月のことだった。

戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」 排水量三万六千七百二十トン、全長二百二十七・二メートル、全幅三十一・四メートル。キングジョージⅡ世級の二番艦として四二年三月に就役し、同年五月ナチス・ドイツ海軍の戦艦ビスマルクと大西洋で交戦した。そのとき被弾損傷したため補修を受けたのちイギリス極東軍に配備された。四連装の三十六センチ砲二基、連装一基の主砲十門を装備していた。艦名は代々の英国皇太子に由来している。

巡洋戦艦「レパルス」 レナウン級巡洋戦艦の二番艦として一九一六年に就役した。二度の兵装強化で連装三十八センチ砲三基、

三連装十センチ砲五基、魚雷発射管二基を備えていた。排水量は三万八千二百トン、全長二百四十二メートル、全幅三十一・三メートル。巡洋戦艦は巡洋艦に戦艦並みの攻撃力を備え、戦艦より高速に航行できることから、第二次大戦の主要国海軍が砲艦の主力とした。

井川忠雄 いかわ・ただお／1893～1947。島根県出身、旧制仙台一中から東京帝国大学法科大学生時学科を出て大蔵省に入った。近衛文磨を座長として一九三三年十二月末に発足した「昭和研究会」に参加し、民間交渉による日米・日英開戦回避に尽力した。

産業組合中央金庫 一九三三年、政府および産業組合（農業協同組合の前身）とその連合会の出資で設立された。のち日本農林中央金庫となった。

河井継之助 かわい・つぐのすけ／1827～1868。名の読みは「つぎのすけ」とも。諱は「秋義」。越後長岡城牧野家の藩政改革を推進した。戊辰戦争では長岡藩の「独立特行」を主張して維新政府軍と和平交渉を行ったが、決裂して戦鬪となった。「北越戦争」と称される戦いに敗れ、会津に向かう途中、只見村で死去した。

及川古志郎 おいかわ・こしろう／1883～1958。岩手県に生まれ一九〇三年海軍兵学校卒、のち海軍大学校卒。二八年少将・呉鎮守府参謀長、第一航空戦隊司令官、海軍兵学校校長を経て中将、三八年第三艦隊司令官、三六年航空本部長、三八年支那方面艦隊司令官兼第三艦隊司令官、三九年大将。四〇年海相に就任し、対米英開戦について明確な考えを示すことがないまま戦争に突入した遠因を作った。四四年軍令部総長としてマリアナ

沖海戦、レイテ沖海戦を指導し大敗、終戦時は軍事参事官の職にあった。

大西瀧治郎 おおにし・たきじろう／1891～1945。兵庫県に生まれ、一九一二年海軍兵学校卒。一八年からイギリス、フランスに駐在し、帰国後は航空兵力の拡充に努めた。三九年第二連合航空隊司令官、四二年航空本部総務部長、四三年中将、四四年第一航空艦隊司令官、軍令部長として航空機による特別攻撃（特攻）を指導した。ポツダム宣言受諾をめぐる協議で徹底抗戦を主張したが容れられず自決した。

淵田美津雄 ふちだ・みつお／1902～1976。海軍兵学校五十二期。同期に源田實、高松宮宣仁王がいる。一九四一年第一航空艦隊の赤城飛行長として真珠湾攻撃の特殊訓練を指導した。真珠湾攻撃における空襲部隊の総指揮官で、全機突入せよの「ト・ト」信号、奇襲成功を伝える「トラトラ」を発信した人物でもある。しばらく連合艦隊がハワイ沖にとどまって、真珠湾に不在だったアメリカ航空母艦を叩くべきと進言したが受け入れられなかった。第二次大戦後はキリスト教の伝道に努めた。

059 新兵器

第五十九

新兵器

一

第一次世界大戦では、潜水艦、爆撃機や戦闘機、水上機母艦、戦車、地雷、毒ガスといった「新兵器」が登場した。ここで「新兵器」とかぎカッコで括ったのは、個々に見れば、いずれも十九世紀末までに登場していたからである。

例えば潜水艦は、一六二〇年にロンドンのテムズ川で初の潜行航行に成功し、一七七六年に初めて兵器として使用されている。

また飛行機はアメリカのライト兄弟によって一九〇三年に発明され、第一次大戦で初めての空爆と空中戦が行われた。戦争が使用法を変え、使用法が変わることで新しい機能が追加された、といっている。

一九一四年九月、第一次世界大戦で膠着状態にあった西部戦線に登場した「タンク」（戦車）と「地雷」もそうだった。

車輪が付いた戦場を駆け巡る利器という意味での「戦車」

は、紀元前のシムメル文明で発生している。中国では三國志のころ、車体の両脇に長い刃を装着して歩兵を撫で斬りにする戦車があった。自動車を分厚い鉄の板で覆い、機関砲を備え、車輪に無限軌道を装備したという点で、イギリス軍が投入した四十九台の「タンク」は画期的だった。

さらに東部戦線では毒ガスも使われている。

さらに画期的だったのは、水上機母艦である。

そもそもは輸送船に過ぎなかったが、それにクレーンと格納庫を備えつけ、敵陣の近くの海面に水上艇を下ろして発進させたのである。さらにイギリスは建造中だった大型巡洋艦「フューリアス」の設計を変更して、前甲板と後甲板を改造した。ここに世界最初の航空母艦が誕生した。

フューリアスは巡洋艦として設計されたために、艦の真中に高い艦橋と煙突がそびえていた。そこでイギリスは、建造に着手したばかりの大型商船の設計を改め、艦首から艦尾までを飛行甲板にして飛行機の発着を専門とする特殊な船「アーガス」を建造した。これがのちの航空母艦の基本型となった。

ついでなので航空母艦について書いておくと、当初から航空母艦として設計された最初の艦船は、日本の「鳳翔」である。この船は浅野造船所で一九二二年に竣工し、翌二三年に就役した。ところが航空機が発着するには甲板の形

状が不備であったり、海洋のうねりによって艦が安定しないなど、大きな問題が潜んでいることが判明した。

「鳳翔」が実戦に配備されたのは一九三二年のことだった。上海事変に動員され、そのとき同艦から発進した日本の戦闘機がアメリカ人パイロットの操縦する中国軍機と初の空中戦を行っている。

太平洋戦争ではミッドウエー海戦に参加したのち、広島の大呉港で飛行機の発着練習用に使われた。米軍の空襲で軽微な損傷を受けたが、一九四五年八月十五日の時点で帝國海軍の空母としていまだに健在だった。

イギリスは日本の「鳳翔」から遅れること二年で「ハームズ」を竣工し、ほぼ同時に「イーグル」を完成させた。アメリカは石炭運搬船として建造中の「ジュピター」の設計を途中から航空母艦に改め、「ラングレー」の名で就役させた。

その後、イギリス海軍は「カレイジャス」「グロリアス」「アークロイヤル」「イラストリアス」「コロッセス」などを、アメリカ海軍は「レキシントン」「サラトガ」「レンジヤー」「ヨークタウン」「ワズプ」「エセックス」などを、フランス海軍は「ベアルン」を、大日本帝國海軍は「龍驤」「蒼龍」「飛龍」「翔鶴」「大鳳」「信濃」「雲龍」「千歳」「瑞鳳」などを建造している。

不思議なことにナチス・ドイツとファシスト・イタリアは空母を建造しなかった。ナチス・ドイツは代わりに潜水艦を作った。このあたり、思想の違いというほかはない。

各国が航空母艦を相次いで建造したのは、ロンドンとワシントンの二度の軍縮会議で、戦艦と巡洋艦の新規建造が規制されたためだった。航空母艦は規制の対象ではなかった。それと空からの敵地爆撃の効果が認識され始めていた。艦数だけだとイギリスが七、アメリカが七、フランスが一、日本が十と、日本が最も多い。しかしイギリスとアメリカは並行して、航空母艦に転換することを前提とした輸送船を建造していた。

潜在的な航空母艦を合わせると、第二次世界大戦の初期、イギリスは二十四隻、アメリカは四十八隻を保有していた。日本は戦ってはならなかったのだ。

二

第二次大戦で登場した「新兵器」は何であつたらう。

戦車、航空母艦、戦闘機、潜水艦などは、第一次大戦から二十五年の間に改良が重ねられ、大きな変貌を遂げていた。なるほど大戦の末期に原子爆弾が発明されたが、通常の使用に供する兵器ではない。

その意味ではおそらく、

——ローターと暗号装置である。

ということになる。

このうちローターについては、すでに書いた。

暗号装置は、コンピュータの基本原理を形成した一要素として、しばしば紹介されている。

最も有名なものは、ナチス・ドイツが使用した「エニグマ」(Enigma) である。

ドイツ語で「謎」を意味するこの装置は、一九一八年にその原理に特許が与えられ、一九二〇年代には商用機が発売されていた。タイプライターと同じキーボード（ただしドイツ語用にウムラウトのキーがあった）からアルファベットを入力すると、内部に装着されたローターでランダムに別のアルファベットに置き換えられ、最終的にはまったく意味をなさないアルファベットと記号の列に変換される。

原理はこうである。

キーボードが動いて何かの文字が打たれると、電流が流れる。すると第一のローターが動いて、第二のローターに信号が送られる。

第一のローターが「A」を発信すると、第二のローターで一つあとの「B」に変換される。第一のローターの「B」が第二のローターで二つあとの「C」に置き換えられる。

すると原文「A B」は、二度の置き換えて「C D」に変換される。

むろん、これでは単純すぎて暗号にならない。

そこで、ローターの周期を違える。

第一、第三のローターが十五回転する間に第二、第四のローターが十七回転する。初期のモデルはローター一個に二十八の電極があったから、電極の数と回転数の相乗によって理論上、三百九十九億六千八百六千四百通りの組み合わせができる。

ドイツの陸軍が制式に採用したのは一九二八年だった。ここでエニグマは軍用に改良され、ローター一個当たりの電極が二十六個に、ローターは三個に減らされたが、反転ローターとプラグボード（統計会計機械装置の配電盤と同じ原理）が採用された。

三個のローターの回転周期を二十六、二十五、十六に高速化したので、文字を変換する理論上の組み合わせは一億八千二百七十九万四千通りだった。そこでさらにプラグボードの配線を変えることで、ほとんど無限大の組み合わせが生成されるというわけだった。

とはいえ、以上はあくまでも理論上の数字であって、実際にいくつものパターンが使用された。送り手が生成した暗号を受け手が解読できなければ何の役にも立たないし、

現場の部隊に数学の専門家がいるわけではなかった。このことは、装置の原理とパターンが判明すれば、傍受者が解読できることを意味していた。

ナチス・ドイツの膨張がソ連を指向していることが明らかになった一九三〇年代、自国が理不尽な戦場となることを恐れたポーランドのマリアン・レイエフスキという数学者が、初期の「エニグマ」の暗号を解読することに成功した。

彼はナチス・ドイツ軍の部隊の間で交わされる暗号文に、

——〇〇から〇〇へ。

——本日、異常なし。

といった定型的な文章が繰り返し入っているに違いないと考えた。

そこで彼は傍受した暗号を丹念に分析して、いくつかの定型文を見つけ出した。仮説と推理によって単語が解読され、個々のアルファベットを元のアルファベットに置き換える方法が発見された。

一九三八年の十月頃、レイエフスキはポーランド軍の参謀本部第二部暗号局に属していたヘンリク・ジガルスキ、イェジ・ルジツキという二人の若い研究者をチームに加えて、符号を一致・不一致を照合して解析する仕組みを考え出した。

これが「b o m b a」（ボンバ…爆弾）という暗号解読機となった。しかしポーランドは「b o m b a」の存在をイギリスやフランス、アメリカなどにも秘匿していた。

暗号が解読されているらしいことを察知したナチス・ドイツは、ローターの数を五個に増やし、ローターの回転周期を変更した。これにより理論上の暗号生成機能が一気に一千倍に引き上げられた。ただし交信のパターンまで変わったわけではなかった。

ポーランドの学者たちはなおも解明の努力を続けたが、ナチス・ドイツ軍の侵攻によって彼らの研究は途絶えてしまった。ただしナチスが侵攻する直前、「b o m b a」の情報はいギリスに引き渡された。

これがイギリスで改良されて「B O M B E」と名付けられ、さらに改良されて「Colossus」（コロサス）となっていく。

三

一九四〇年の二月、イギリス軍は最新の「エニグマ」のローターを手に入れることができた。大西洋上で捕獲したドイツ海軍潜水艦（Uボート）「U 33」号の乗組員が、ボケットの中のローター二個を破棄するのを忘れたためだっ

た。

そのローターはただちにケンブリッジ大学のキングスカレッジに送られて、暗号解読研究チームに渡された。

次いで同年五月、同じく大西洋上でトロール漁船を偽装していたドイツのスパイ船から、大量の通信文書が接収された。これもまたキングスカレッジに送られた。暗号文とそれを解読した文書を照合すれば、仕組みが解明できるはずである。

ここにマックス・ニューマンという数学者がいた。

彼はイギリス郵政省の研究班と共同で、暗号解読装置の開発を行っていた。その装置はナチス・ドイツ総統ヒトラーが連絡に使う専用の暗号「フィッシュ」を解読するのが目的だった。彼はフィッシュ暗号を統計的に解析する装置の開発を進めていた。

彼は、教え子で英米首脳間秘話装置の開発を担当していたアラン・チューリングを中心に、アメリカの研究者を交えたチームを作り、エニグマ暗号を解読する作業に着手した。

イギリス政府はキングスカレッジに約一千人の数学者、数学者などを集めて解読に当たったという。しかるにアラン・チューリングが初めて「エニグマ」の暗号体系を解明した。

彼が作成した「チューリング・マシン」および、一九四三年に開発した暗号解読装置「コロツサス」がヨーロッパ戦線の状況を一変させた。ナチス・ドイツ空軍機の爆撃目標が事前に把握できるようになっていく。

——イギリス政府は解読に成功したことをナチス・ドイツに知られなくなかったので、コペントリーにドイツ軍の空襲があることを承知しながら、住民に避難を勧告しなかった。

という話がある。

だが、これはどうやら後世の創作であるらしい。

当時の研究者たちは、ドイツ空軍が使用していたイギリスの都市名のコードまでは解読できなかった。エニグマ暗号を解読したとき「KORN」で示された都市を、彼らはロンドンだと考えていた。暗号とは別に符号の解読も必要だったのである。

四

ナチス・ドイツと同盟を結んでいた日本にもUボートによって「エニグマ」の技術が伝えられた。そのまま適用されなかったのは、アルファベットと日本語の違いゆえだった。

日本語にはアルファベット、数字のほかにカナがある。通信文をカタカナにして、受信側で漢字交じり文に直すにしても、文字種が倍も多い。

このため日本では独自の改良を重ね、「エニグマ」と同じ原理ながら異なる機構を採用した「紫」を外交文書や外交指令に適用した。また海軍は「九七式欧文印字装置」を開発し、陸軍は「三式換字機」を作った。

このうち「紫」は日米交渉中にあらかたが解読され、海軍の「九七式」は太平洋戦争が始まった半年後から一年後の間にほとんど役に立たなくなった。アメリカの政府や軍にとつての重要度の順と考えればいい。

エニグマを真似たとはいえ、「紫」は日本語を暗号化する独自のコード体系を持っていた。そこでアメリカ連邦政府は専用の解読装置を開発することにした。

初期の解読は人手によって行われ、次いで「エニグマ」用に開発された「BOMBE」という装置が適用された。

この装置の開発にはイギリスのチューリングもかかわった。一九四一年に入って、ウイリアム・フリードマンが「紫」の解読に成功した。彼は「紫」のコードを解明したばかりでなく、海軍の「九七式欧文印字装置」の模造機を作つてもいる。

フリードマンが作製した「紫」解読装置は「パープルマ

シン」と名付けられ、日米開戦までに八台が作られた。そのうちの二台がイギリスに手渡され、ロンドンの北方七十キロのブレッチリーという町にあった「政府通信本部」(ブレッチリー・パーク)に設置された。

ブレッチリー・パークのスタート時は二百人程度だったが、第二次大戦末期には補助要員も含めると二万人にのぼる人々が働いていた。そこでベルリンの駐独日本大使館が発信する暗号文を傍受して解読した。

首相チャーチルが側近に「ブレッチリーは私のウルトラシークレットだ」と語ったことから、同本部で解読されたナチス・ドイツや日本の暗号通信文は「ウルトラ」と総称された。ドイツで開発された暗号技術が日本を経由してアメリカからイギリスに渡り、太平洋戦争の戦況を左右したことになる。

ワシントンの駐米日本大使館は、「九七式欧文印刷装置」と「紫」で本国と電信文をやり取りしていた。「海軍甲」と称された方式である。

少なくとも一九四一年十月以後、アメリカ連邦政府の対日交渉グループは日本政府の対米英開戦決意や「帝国国策遂行要領」を周知していたわけだった。ドイツ・ベルリンにある日本大使館から発信される情報と照らし合わせていたアメリカ連邦政府は、日米交渉の主導権を完全に握って

いた。

しかし、だからといってアメリカ連邦政府は、日本がいつ宣戦を布告してくるかまで承知していたわけではなかった。というのは、日本帝國陸軍は「三式換字機」という別の暗号装置を使っていたし、海軍は外務省とは異なるコード体系を持っていた。

海軍には「甲」「乙」「丙」「丁」「戊」「辛」「巳」のほか、「D」「F」「G」「H」「J」「S」「W」の計十四種があり、かつ独特の略語、符号などがあつた。

こうした体系を整えたのは、中央大学法学部を出た藤崎栄である。藤崎ははじめ警察官となつたが、独力で暗号を研究して外務省の入省試験を受けた。一次試験は首位で合格したが、従兄弟が思想問題で憲兵に連行されていたために最終選考で不合格となつた。

ところが彼の論文が中野高等無線学校の創立者である高木章（第二次大戦後、衆議院議員）の目にとまつた。高木は藤崎を中野高等無線学校の教師として招き、ややあつて、海軍航空本部技術部長（少将）だった山本五十六に校長となつてもらえるよう請願した。

藤崎が交渉の窓口となつた。

高木の請願は実現しなかつたが、後日、山本から藤崎に

——海軍の仕事をしる。

という指示がきた。

これ以後、藤崎は海軍の暗号に関わるようになる。

日米開戦の前夜、日本の外務省はワシントンの駐米日本大使館に長大な通信文を送信した。対米交渉の打ち切りを告げる「対米覚書」すなわち最後通告である。

全部で十四部から成る長文であつたため、外務省は細かく区切って送信した。最初のパイロット・メッセージ「九〇一号電」の送信が開始されたのは、一九四一年十二月六日午前六時三十分だつた。

それは外相・東郷茂徳の名で、

「十一月二十六日決定の「対米覚書」（英文）を送る」

「長文なので分割して順次送る」

「極秘扱いである」

「手交時刻はのちに指定する」

「いつでも手交できるよう文書作成に万端の手配をせよ」
などが指示されていた。

日米覚書の最後となる第十四部が送信されたのは十二月七日午前二時、エンディング・メッセージ「九〇七号電」は同日午前三時三十分である。

その九〇七号電には

本件は七日午後一時を期し米側に（なるべく國務長官に）

貴大使より直接手交ありたし

となっていた。「七日午後一時」とは、もちろんワシントン現地時間である。

ところが日本大使館の上層部には危機感が薄かった。その結果、駐米日本大使・野村吉三郎がアメリカ国務長官コーデル・ハルに文書を手交したのは、日本軍の航空機がハワイ真珠湾を攻撃したあとだった。このため日本は騙し討ちをしたことになった。

一九四一年十二月八日にかかわるもう一つの暗号がある。連合艦隊司令長官・山本五十六が戦闘開始を命令した「ニイタカヤマノボレ一二〇八」でも、南方軍が上陸に成功したことを知らせる「ハナサクハナサク」でも、機動部隊長官・南雲忠一が発した真珠湾攻撃に成功したことを知らせる「トラトラトラ」でもない。

それは日本の大本営（陸軍参謀本部と海軍作戦本部で組織）が開戦の最終決定を関係機関や諸部隊に通知する暗号であって、のちに「風暗語」と呼ばれている。

日本政府が陸海軍と協議して一九四一年十一月十九日に取り決めた符号で、海外向けラジオ短波放送で発せられる天気予報である。

——アメリカとの開戦を決定した場合は「東の風、雨」

を挿入する。

というものだった。

また英蘭仏と戦争を開始する場合には「西の風、晴」、ソビエトを攻撃する場合は「北の風、曇」と合図されることになっていた。

十二月五日、

「東の風、雨」

「西の風、晴」

のメッセージが、外地の諸部隊に向けて発せられた。

補注

潜水艦 これに類する乗り物の記録は古代にもある。しかし近代的な意味での潜水艦の元祖は、ロンドンに住んでいたオランダ人の船大工であるコーネリウス・ドレベルが考案した。グリースを塗った皮で木造船を包み、十二人の乗員が船体から突き出したオールを漕いでテムズ川を潜水したまま数マイルさかのぼることができた。二〇〇三年に民間団体が復元しその事実を確認した。

潜水艦が戦闘に使用された最初はアメリカ南北戦争で、一七七六年南軍のデービッド・ブッシュネルが作った「タートル号」がニューヨーク沖に停泊していたイギリス戦艦「イーグル号」に地雷を仕掛けようとして失敗した。タートル号は手動のスクリュエ二基で航行し、のちの潜水艦と同様、船体に装備したタンクに水を出し入れする機構を備えていた。

飛行機による世界最初の爆撃 一九一四年八月、ドイツ帝国陸軍の複葉飛行機がフランスのリュネビ上空に飛来し、操縦士が爆弾を手でつかんで二発の爆弾を投下した。日本帝国軍における空爆は同年八月、陸軍所屬の五機および、海軍所屬の飛行艇六機がドイツ帝国租借地だった中国山東省の青島に爆弾を投下したのが最初とされる。海軍は横須賀の海軍工廠で「若宮丸」という運送船を改造して水上機搭載設備を備え、青島近海から飛行機を発進させた。

タンク (戦車) と地雷 第一次大戦の西部戦線でドイツと英仏連合軍は長大な塹壕を築いて膠着状態に陥っていた。ここに「スベイン風邪」と呼ばれた悪性のインフルエンザが発生した。長期戦

による倦怠感と病人の続出で士気が低下した。これを打破するためにイギリスが投入したのが「タンク」だった。ドイツ帝国もすぐに採用した。タンクから陣地を守るために開発されたのが地雷である。

ドイツ帝国は対ロシアの東部戦線も展開していたため経済的に二面作戦を維持することが困難になった。そこで投入したのがマスタードガスだった。これにより近代戦争は、機械化による大量破壊、大量殺戮に変質していった。

水上機母艦 最初に実戦に使用したのはイギリスだった。ドイツ帝国軍の潜水艦が無差別攻撃を行ったことへの報復として、イギリスはドイツ空襲を思いつき、二千トンから一万トンの商船を改造して水上艇をドイツ近海に運び、数機編成で空爆した。

フューリアス 一九一六年八月進水、一七年六月に巡洋戦艦として就役した。全長二百四十メートル/最大排水量二万八千五百トン。その後、主砲を撤去して全通式発艦甲板を備えた航空母艦となった。最大四十機を搭載することができた。

アーガス イタリアのトリノに本社を置く旅客サービス会社ロイド・サバイド社が発注した貨客船をイギリス海軍が買い取って航空母艦に仕立てた。就役は一九一八年九月だった。全長百七十二・五メートル、最大幅二十・七メートル、最大排水量一万五千七百七十五トンだった。最大二十期を搭載することができた。

空母「鳳翔」 ほうしょう。九千四百九十四トン。第二次大戦後、復員船として一九四六年八月まで就航し、一九四七年五月に日立造船で解体された。

エニグマ ギリシア語で「謎」の意味。特許を出願し認められたのはアルトゥール・シエルビウス (Arthur Scherbius / 1878

（1929）というドイツの数学者だった。彼の特許を用いてシフレン・マシーネン社が一九二三年に製品化し発売した。当初は秘匿情報を知られたくない証券取引きや軍事用の通信などに利用された。

マリアン・レイエフスキ Marian Adam Rejewski / 1905 ~ 1980。プロイセン王国ポズナン州（一七九三 ~ 一九一八年までドイツ領だった）で生まれたことからドイツ語を自在に操ることができた。一九二九年ポーランド軍参謀本部の暗号局でドイツ海軍の暗号研究に従事し、三二年ごろからエニグマの解読に取り組んだ。

ヘンリク・ジガルスキ Henryk Zygalski / 1908 ~ 1978。ポーランドのポズナン大学の同窓生であるマリアン・レイエフスキ、イエジ・ルジツキと共同でエニグマの解読方法と解読装置の開発に取り組んだ。のちイギリスに亡命して大学で教鞭を取った。イエジ・ルジツキ Jerzy Witold Różycki / 1909 ~ 1942。ポーランドがナチス・ドイツとソ連に分割され事実上消滅したあともフランスに亡命してエニグマの解読に取り組んだ。

マックス・ニューマン Maxwell Herman Alexander Newman / 1897 ~ 1984。父親がユダヤ人だったためナチス・ドイツとの戦いに参加する意味から、四十五歳のとき（一九四二年）イギリス政府通信部でドイツのテレタイプ端末用暗号「Tunny」を研究した。ここで「ヒース・ロビンソン」と名付けた暗号解読装置を開発した。

トニー・フラワーズ Thomas Harold Flowers / 1905 ~ 1998。「ヒース・ロビンソン」に真空管を適用して信頼性を高めたのが世界初のデジタル計算機「Colossus」となった。

Colossus コロッサス II「ロードス島の巨像」(Colossus of Rhodes) のこと。台座を含めると高さ約五十メートルの太陽神ヘリオンの像だったという。紀元前二二六年の地震で倒壊したが、その残骸は六五四年にイスラム教徒が持ち去るまで見物客を集めていた。

計算機「Colossus」 第二次大戦中に「Mark I」「Mark II」の二機種計十台が製造された。Mark IIが解析したナチス・ドイツの情報に基づいてノルマンディ上陸作戦が策定されたといわれる。

Uボート Unterseeboot: ドイツ海軍の保有する潜水艦の総称で、第一次世界大戦のとき三百隻が建造され商船五千三百隻、戦艦十隻を撃沈させた。第二次世界対戦では千百三十一隻が建造され、商船三千隻、戦艦二隻、空母二隻を沈めた。ヨーロッパ戦線だけでなく、インド洋でイギリス連邦の商船を攻撃している。また日本にも模造艦建造のために一隻が贈呈された。ちなみに「U33」はドイツ海軍第二潜水隊群所属の潜水艦だった。

アラン・チューリング Alan Mathison Turing / 1912 ~ 1954。ロンドンで生まれ、一九三二年ケンブリッジ大学のキングス・カレッジに入学し、数学を専攻した。一九三六年から三八年まで米国のプリンストン大学に留学、ここで教授をしていたフォン・ノイマンから助手として誘われたが、それを断ってケンブリッジ大学に戻った。三八年、ナチス・ドイツの暗号「フィッシュ」 「エニグマ」の解析に当たり、独自の解読装置を作ること成功した。四二年、暗号解読技術の交流のためアメリカに派遣され、帰国後、真空管を使った新たな暗号解析機「コロッサス」の開発に従事した。戦争が終わった一九四五年、イギリス国立物理学研

究所に入り、ここでイギリスの国産コンピューター開発プロジェクト「ACE」に参加、四八年にアメリカに移ってマンチェスター大学の計算機担当になった。論文「計算機構と知能」(一九五〇)は人工知能の先駆けとなった。五四年、青酸カリで自殺した。

コベントリー Coventry: ロンドン北西約百キロにある中規模都市。第二次大戦では、聖ミッシェル教会がドイツ軍空爆の目標とされ、現在も廃墟が残されている。この町の伝説にいわく——。中世の領主リオフリクの夫人ゴダイヴァは、重税に苦しむ住民の税を軽くするよう王に願ひ出た。すると王は「白馬に乗り裸で町を歩いたら願ひをかなえよう」といった。彼女は裸で馬に乗り町に出たが、住民は戸を下ろして見ようとしなかった。ところが一人だけこっそりとのぞき見した男がいた——それが「ピーピン・グ・トム(のぞき見男)」の由来になったという。

映画『エニグマ』 ダグレイ・スコット主演、マイケル・アプテッド監督、二〇〇一、イギリス。

紫(パープル) ワシントンで野村—ハル会談が続けられていた一九四一年の早い時期にアメリカ情報部に知られ、「パープル」と名付けられた。このほかに九一式欧文印字機は「レッド」、三式換字機は「グリーン」などと呼ばれた。

ウィリアム・フリードマン William Frederick Friedman / 1891~1969。米陸軍シグナル・インテリジェンス・サービス(SIS)に属して暗号の解読に当たった。一般的に暗号を解読するには、多くの暗号文の中から多用される反復文を探し出し、これから暗号を解く鍵を見つけていく。しかしフリードマンはいきなり模造機を作った。このため多くの専門家は、アメリカ連邦政府は何らかの工作で日本から暗号機的设计図ないし機構に関する

情報を入手したのではないかと疑っている。そのことについて連邦政府は「国家機密」として明らかにしていない。

妻のエリザベス (Elizabeth Smith Friedman / 1876~1980) も暗号解読の研究者で、彼女は中南米に潜むドイツ系反米勢力の攻撃を警戒する任に当たっていた。

二台のパープルマシン 一台は、本来はハワイのアメリカ軍基地に設置される予定だった。日米開戦直後にキンメル中将は罷免されたが、「ワシントンが十分な情報を提供していなかった」とする名誉回復の裁判で「パープルマシン」の配備が焦点となり、キンメルの主張が認められている。

フリードマンが作った「パープルマシン」は、ロンドンの北方七十キロのブレッツチリーという町にあった「政府通信本部」(ブレッツチリー・パーク)に設置された。スタート時は二百人程度のスタッフだったが、第二次大戦末期には補助要員も含めると一万人にのぼる人々が働いていたという。

その所在は枢軸国側には全く知られなかった。首相チャーチルが側近に「ブレッツチリーは私のウルトラシークレットだ」と語ったことから、同本部で解読されたナチス・ドイツや日本の暗号通信文は「ウルトラ」と総称された。

海軍甲 カタカナ四文字のコードブックに基づき、カナ乱字で暗号化していた。まず通信文の語句をコードブックでカタカナ四文字に置き換える。その符号の下にカナ乱字を記入する。こうして生成された「符号+乱字」の縦列二字を九七式和文印字機で叩くと秘匿用算用数字がタイプされる。海軍甲暗号は通信量が大きくなるため、帝国海軍では大本営海軍部発の作戦命令などに限定して使用した。

対米覚書 当初、最後通告の発信開始時刻は「六日午前二時」となっていた。それが四時間半も遅れたのは、通信文を暗号化するのに手間取ったためだった。

日本IT書紀 04 含牙篇 卷之七 乾坤

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。